ボクの決意ができるまで

alnas

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平穏、人並みの幸せ。そんなものにかまけてはいられなかった。限りある時間を使い、一から学ばなくては、知らなくてはならなかったから。

理由はわからない。

敵だって知ることはできない。

なにを準備するべきか、警戒するべきかの判断がつかない。

そもそも、いつ、どこで、本当に起きるかすらの保証もない。

それでも、あの未来を覆さなければならない。そのために、この身は時間を使ってきたのだから。

これは愛と希望の物語の裏方に徹し続けた男の物語。

※終章をクリアしてない方、ネタバレを気にする方は読まないことをお勧めします。

目次

確定した未来の始まり ―― 1
するべきこと ―― 13
協力者来る ―― 30
大切なモノとは ―― 51
未来を取り戻す戦い ―― 73
束の間の休息 ―― 98
僕らの証明はどこにある ―― 115

確定した未来の始まり

過去の自分を、滑稽だとは思わない。

なんでもできた、なにもできなかったあの頃。自身の意思はなく、生まれたときから生き方を、在り方を定められた日々。

それを変えるきっかけとなったひとつの戦い――いや、争いと表現するべきなんだろうか。

相棒とも、主とも呼べる一人の男と駆け抜けたその先に待っていたのは、私という存在の在り方だった。

そこから私は、ボクへとなった。

だけど、それでも走り続けなければならなくなった。平穏、人並みの幸せ。そんなものにかまけてはいられなかった。限りある時間を使い、一から学ばなくては、知らなくてはならなかったから。

理由はわからない。

敵だって知ることはできない。

なにを準備するべきか、警戒するべきかの判断がつかない。

そもそも、いつ、どこで、本当に起きるかすらの保証もない。
それでも、あの未来を覆さなければならない。そのために、この身は時間を使ってきたのだから。
この身を滑稽だとは思わない。
仮に、あらゆる自由がなかったとしても。充実していなかったとしても。幸福ではないかもしれないけど――この時間は、この人間性は、ボクだけのものだから。

習慣になったブログのチェックを終え、席を立つ。
立てかけてある白衣を羽織り、自室を後にする。このまま職務を全うするために出向くのは簡単だが、今日は大事な日だ。
いつものように無駄にサボっても仕方がない。
「やあ、みんな。いよいよ今日だね。ボクも力の限り――」
「ロマニ、ちょっと。あなたは今日、休んでていいわ」
「あれ？　ねえ、所長？　ボク今日は割とやる気があってここまで来たんだけ、ど……ええ……」
入った直後、所長の命令により追い出されてしまった。

それも、酷くどうでもいい理由でだ。人のやる気をなんだと思っているんだろう。
「そういえば、一室空き部屋があったっけ」
スタッフ総出でことに当たってるから、みんななにかしらやることがあるだろうし、話相手を捕まえるのも難しい。仕方ないから、▪空き部屋で拗ねているとしよう。

異変が起きたのは、それから少し経ってのことだった。
「はーい、入ってまー――――って、うぇえええええ!?　誰だ君は!?　ここは空き部屋だぞ、ボクのさぼり場所だぞ!?　誰のことわりがあって入ってくるんだい!?」
突如として部屋に入り込んできた少女に驚きながら質問すると、
「おまえこそ何者だ」
フレンドリーとは程遠い答えが返ってきた。
ここで攻撃されれば無力なボクでは太刀打ちできないので、明るく無害なことを証明しよう。幸い、彼女のことは少しばかり知っているしね！
「何者って、どこからどう見ても健全な、真面目に働くお医者さんじゃないかな！　いやあ、はじめまして立香ちゃん。予期せぬ出会いだったけど、改めて自己紹介をしよう」
「あ、はい」
反応がいまいちだけど、気にしない。

朝の仕打ちに比べればメンタルはまだまだ大丈夫。ボクの心は硝子じゃないぞ！

「ボクは医療部門のトップ、ロマニ・アーキマン。なぜかみんなからＤｒ．ロマンと略されていてね。理由はわからないけど言いやすいし、君も遠慮なくロマンと読んでくれていいとも。実際、ロマンって響きはいいよね。格好いいし、どことなく甘くていいかげんな感じがするし」

事実だ。

ロマンという言葉を知ったときから、それはどこか、ボクに響いた。本音を言えば、美しいと思ったんだ。

「……ああ、ゆるふわ系なんだ……」

なんて思っていると、立香ちゃんはよくわからないことを口にした。

「ふわふわ？　ああ、髪型のコト？　時間がなくてね、いつも適当にセットしてるんだ」

ゆるふわ。

その単語から連想されたのは、自身の髪のことだった。

「……」

そんなことは気にせずに彼女を観察していると、肩のあたりにある物を発見した。

「あれ？　君の肩にいるの、もしかして噂の怪生物？　うわあ、初めて見た！　マシュから聞いてはいたけど、ほんとにいたんだねぇ……どれ、ちょっと手なずけてみるかな」

懐から駄菓子を取り出し、反対の手の平をもふもふした生物へと向ける。
「はい、お手。うまくできたらお菓子をあげるぞ」
「……フウ」
だが、その生物はボクにまったく関心を示さず、つまらなそうに声を漏らした。
「あ、あれ？　いま、すごく哀れなものを見る目で無視されたような……」
改めて見ても、やはりこちらを見向きもしていない。
「……どんまい、ドクター」
「ああ、うん……と、とにかく話は見えてきたよ。君は今日来たばかりの新人で、所長のカミナリを受けたってところだろ？」
この時間に彼女一人がここに来たのがなによりの証拠だ。本来なら、この時間に自由に歩き回ってはいられない。
「なら、ボクと同類だ。なにを隠そう、ボクも所長に叱られて待機中だったんだ。もうすぐレイシフト実験が始まるのは知っているね？　スタッフは総出で現場に駆り出されている。けど、ボクは医者でね。みんなの健康管理が仕事だから、正直やれることがなくてね」
より詳しく言えば、所長に「ロマニが現場にいると空気が緩むのよ！」と言われ追い出されたんだけど。

「上司からの扱いに拗ねて、ここにいたってわけさ」
本当はすべてが終わるまでここで一人、時間を潰してようかと思っていたんだけど。
「でも、そんなときにキミが来てくれた。地獄に仏、ぼっちにメル友とはこのことさ。所在ない同士、ここでのんびり世間話でもして交友を深めようじゃないか！」
不思議と、目の前の彼女が脅威でないとわかる。
このボクが、初対面で交友を深めようと言える程度には。これには▪ボク自身が驚いているくらいだ。
「別に私、ぼっちじゃないんですけど」
しかし、当の彼女は少し不機嫌そうに、口を尖らせてそう言った。
「バカな！」
つい、大きな声が出てしまったのは仕方のないことだ。
「来たばかりの新人なのにもう友人がいるなんて、なんてコミュ力なんだ……！　あやかりたい！」
ほんと、ボクにとっては喉から手が出るほど欲しい力じゃないか！　立香ちゃん、キミはいったい何者なんだ！　ボクと同じ類の人ではなかったのかい……？
「あの、ドクター？」
膝から崩れ落ちたボクを心配するような声が上から聞こえる。

「だいじょうぶ、ボクのことは気にしなくていいから」
「いや、そうじゃなくて」
「ほんと、平気だから。たとえぼっちでも、いまこうしてキミと話せているからね……」
「じゃなくて。ドクター、少し聞きたいことが」
あ、そうだよね……心配するよりも情報の方が大事だよね。よく、よくわかるよ。
立ち上がり、近くの椅子に腰かけた。
察してくれたのか、彼女もベッドの縁に座る。
「それで、なにを聞きたいんだい？」
「あの、ここ――カルデアのことを」
そんなことか。
ああ、いいとも。ボクは無駄話が好きだから、長くなってしまうかもしれないけれど。
それでも、キミはきっと聞いていてくれるのだろう。
初めて出会ったばかりの少女に、ある種の確信を持ちながら、ボクは話を始めた。
「――と、こんなところかな。っと、ごめんね」
『ロマニ、あと少しでレイシフト開始だ。万が一に備えてこちらに来てくれないか？』
レフ。同じくカルデアで働く技師の一人、レフ・ライノールから連絡が入った。

「やあレフ。わかった、すぐにそっちに行くよ」
『ああ、急いでくれ。いま医務室だろ？　そこからなら二分で到着できるはずだ』
なん、だと……？
「……隠れてさぼってるから……」
うっ……立香ちゃんからの言葉がよく刺さる。
「それは言わないでほしい……ここからじゃどうあっても五分はかかるぞ……ま、まあ少しぐらいの遅刻は許されるよね」
いっそのこと一時的な記憶喪失とかでサボろうかとも考えたが、まず確実にバレる。だったら潔く出向くべきだ。
「ああ、そうだ。いまの男はレフ・ライノールと言うんだ」
「はい、先ほど会いました。ドクターとは違う意味で、話しやすい人でした」
そっか、会っていたんだね。っと、ここで話し込んでいたらいよいよもって所長やレフから文句を言われちゃうな。
「ボクは行くよ。お喋りにつきあってくれてありがとう、立香ちゃん。落ち着いたら医務室を訪ねに来てくれ。今度は美味しいケーキぐらいはご馳走するよ」
キミはボクの話をよく聞いてくれたし。くだらない世間話にも応じてくれた。それくらいのもてなしはしないとね！

彼女に手を振り、部屋を出ていこうとしたとき。
「なんだ？　明かりが消えるなんて、なにか――」
変だ、と言葉は続かなかった。
どこからかはわからないが、大きな音が響き、直後、アナウンスが流れる。
『緊急事態発生。緊急事態発生。中央発電所、及び中央管制室で火災が発生しました。中央区画の隔壁は９０秒後に閉鎖されます。職員は速やかに第二ゲートから退避してください。繰り返します。中央発電所、及び中央――』
「いまのは爆発音か!?　一体なにが起こっている……!?　モニター、管制室を映してくれ！　みんなは無事なのか!?」
管制室で火災が起きたと聞こえた。
最悪の事態にだけはなっていなければいいが……。
「……管制室って、マシュは……？」
隣にきた立香ちゃんが小さな声で話しかけてくるが、
「これは――」
答えている場合じゃないぞ！
「立香ちゃん、すぐに避難してくれ。ボクは管制室に行く。もうじき隔壁が閉鎖するからね。その前にキミだけでも外に出るんだ！」

彼女を置いて、急いで駆け出す。しかし。
「いや、なにしてるんだキミ!?　方向が逆だ、第二ゲートは向こうだよ！」
彼女が走る方向を真逆を指しながら叫ぶ。
極度の方向音痴でもないだろうに、どういう理由だ！
「まさかボクについてくるつもりなのか!?　そりゃあ人手があった方が助かるけど……ああ、もう！　言い争っている時間も惜しい！　隔壁が閉鎖する前に戻るんだぞ！」
ボクの言葉にひとつ頷くのを確認し、再び走り出す。
あのときの未来の光景。
私であることを捨てたあのとき。ボクのすべてはあそこから続いている。そして、いま。ボクの進むべき未来は確定されようとしていることを、どこかで感じていた。
「誰か！」
管制室に飛び込んでいく立香ちゃん。
続くようにして入ると、燃え上がる炎と、破壊された痕が残っていた。
「……見た限りの生存者はいない。無事なのはカルデアスだけか。ここが爆発の基点だろう。これは事故じゃない。人為的な破壊工作だ」
『動力部の停止を確認。発電量が不足しています。予備電源への切り替えに異常があります。職員は手動で切り替えてください。隔壁閉鎖まで、あと、４０秒。中央区画に

残っている職員は速やかに――」

時間もない。

逃げることもできないときたか。

「……ボクは地下の発電所に行く。カルデアの火を止める訳にはいかないからね。キミは急いで来た道を戻るんだ。まだギリギリ間に合う。いいな、寄り道はするんじゃないぞ！　外に出て、外部の救出を待つんだ！」

せめて。

キミだけでも逃げてくれれば。助かってさえくれれば。

ボクにはボクの戦いがある。

この体は平凡で。この頭にはすべての知識があるわけでもない。けれど、けれど！

駆ける・足は止まるどころか、徐々に速度を上げていく。

『観測スタッフに警告。カルデアスの状況が変化しました。シバによる近未来観測データを書き換えます。近未来百年までの地球において、人類の痕跡は発見できません。人類の生存は確認できません。人類の未来は保証できません』

最悪だ……まさか、今日にそれが発覚するなんて！　でも、諦めるわけにはいかない。頼れる人間なんて一握り。ボク自身は完全な凡人で。けれど『人類の危機』を乗り切るためにすべてをつぎ込んできた！　投げ出してきた！

無力で、無知で、矮小な存在であったとしても。

無視することができたのなら、どれだけ楽だっただろう。でも、それはできない。だって、これはボクの、私の関わる事態なのだろうから。そのためにも、ボクが止まっていられる時間なんて、過去も、いまも。そしてこれからも、あってはならないんだから——。

するべきこと

今日がボクの戦いだす日だと、なんとなく悟っていた。

警報を聞いたときから、一度も思考は止まらない。ただ最善に、最大の効率を引き出すために。自分の関係するだろうこの最悪を回避するために。

管制室のモニターに、二人の少女の姿が浮かぶ。

「ああ、やっと繋がった！　もしもし、こちらカルデア管制室だ、聞こえるかい!?」

叫ぶように反応を求めると、一人の少女が答える。

『こちらＡチームメンバー、マシュ・キリエライトです。現在、特異点Ｆにシフト完了しました。同伴者は立香一名。心身ともに問題ありません』

ボクの同僚にして、多くのことを話してきた少女。

『レイシフト適応、マスター適応、ともに良好。立香を正式な調査員として登録してください』

そうか、彼女は無事に……いや、これは個人的な話だね。貴重な時間を感慨にふけって無駄にしてはいけない。話はまたできるじゃないか。まずは、状況確認と説明が先だ。

立香ちゃんには特に必要かな。

「にしても……やっぱり立香ちゃんもレイシフトに巻き込まれたのか……」

地下に向かう途中に何事かと思えば、レイシフト開始なんて流れたから、まさかとは思っていたけど。

「でも、コフィンなしでよく意味消失に耐えてくれた。それは素直に嬉しい」

ボクにとっては、放っておけない子たちだからね。ああ、もちろんこれは口に出したりしないよ。年頃の女の子たちに言うと気持ち悪がられる・って言われたばかりだからね！

「それよりもだ。マシュ、キミが無事なのも嬉しいんだけど、その格好はどういうことなんだい!?　ハレンチすぎる！　ボクはそんな子に育てた覚えはないぞ!?」

『……これは変身したのです。カルデアの制服では先輩を守れなかったので』

変身、だと……？

「あはは、マシュ、なにを言っているんだい？　変身？　頭でも強く打ったのか？　それとも、やっぱりさっきので……」

『――Ｄｒ．ロマン。ちょっと黙って。私の状態をチェックしてください。それで状況は理解していただけると思います』

うん、わかってはいたけど、黙ってと言われるとぐっさり刺さるな。なまじ付き合い

の長いだけに余計に痛い。
　とりあえずはチェックからだね。
「キミの身体状況は――お……おお、おおおぉぉおおお!?」
　身体能力、魔力回路、すべてが向上している!?　この短期間で?　いや、そもそも魔力回路は……まさか……。
「これは人間というより――」
『はい、サーヴァントそのものです』
　ボクが言葉にする前に、マシュ本人が答えた。そのまま、起きたことを話し出す。
『経緯は覚えていませんが、私はサーヴァントと融合したことで一命を取り留めたようです。今回、特異点Fの調査・解決のため、カルデアでは事前にサーヴァントが用意されていました」
　なるほど、だいたいのことは読めた。
　爆破によってマスターを失ったサーヴァント。その一人がマシュに協力してくれたわけか。
「英霊と人間の融合……デミ・サーヴァント。カルデア六つ目の実験……そうか。ようやく成功したのか。では、キミの中に英霊の意識が?」
『いえ、彼は私に戦闘能力を託して消滅しました。最後まで真名を告げずに。ですので、

私は自分がどの英霊なのか、自分が手にしたこの武器がどのような宝具なのか、現時点ではまるでわかりません』

「……そうなのか。だがまあ、不幸中の幸いだ。召喚したサーヴァントが協力的とは限らないからね。けど、マシュがサーヴァントになったのなら話は早い。全面的に信頼できる」

土壇場で裏切ることもないだろう。

過酷な運命を背負わせることにはなるが、それはそれだ。メンタルのケアくらいならいくらでも請け負おう。本当なら、ボクもそっちに行ければいいんだけど……。

「いまのボクが同行したところで無意味か」

周りでは、生き残ったわずかな人員が、いまも作業を続けている。ここを放棄してはいけない。繋ぎ止めなくては。ボクができるのは、待つことだけだ。

「立香ちゃん。そちらに無事シフトできたのはキミだけだ。そしてすまない。なにも事情を説明しないままこんなことになってしまった」

本来なら、多くの説明を受けていただろう。

こんな危険な状況に放り込まれることもなかっただろう。

「わからないことだらけだと思うが、どうか安心してほしい。キミには既に強力な武器がある。マシュという、人類最強の武器がね」

だから、せめて明るく努めよう。
彼女たちの不安が和らぐように。ボクの不安を、悟らせないように。
『……最強というのはどうかと。たぶん、言い過ぎです。後で責められるのは私です』
くっ、思ったより難しいかもしれないな。でもやらないと！
「まあまあ。サーヴァントはそういうものなんだよって立香ちゃんに理解してもらえればいいんだよ」
まだ理解できていないのか、わけわからない、という顔をしている立香ちゃん。
さて、ひとまず、立香ちゃんにマスターとサーヴァントの説明からしていこうかな。
そういうのは、たぶんボクの仕事だろうから。
『ドクター、通信が乱れています。通信途絶まで、あと十秒』
おっと、時間を使いすぎたかな。
ある程度の説明すら終えてないんだけど、マシュからそう促された。
「予備電源に替えたばかりでシバの出力が安定していないのか。仕方ない、説明は後ほど。二人とも、そこから2キロほど移動した先に霊脈の強いポイントがある。なんとかそこまで辿り着いてくれ。そうすればこちらからの通信も安定する。いいかな、くれぐれも無茶な行動は控えるように。こっちもできるかぎり早く電力を――」
あ、切れた……。

だいじょうぶかな？　ま、まあ仮にもサーヴァントとしての戦力もあるわけだし、ある程度ならどうにかしてしまうんだろうけど。ああ、それでも心配なものは心配だ！

「でもこっちからできることはまだないしなぁ。せめて機器の修理でもしておくか」

現状、生き残っているスタッフのメンタルケアは必要ないし、そもそも、機器の修理と安定を優先しなければこの先が不安で仕方ないのも事実だ。

「まったく、なにをうろうろしているんだい、ロマニ。そうしているだけ時間の無駄だよ」

やるべきことすらやれずにいると、呆れたように声がかかる。

「ほら、しっかりしなさい。というより前を見たまえ」

「うげ……」

「大層つまらない反応をありがとう、ロマニ。でもその反応は今後禁止だ。いいね？」

一方的なことを言い出す女性――いや、ここは彼と呼ぶべきだろう。

そして反応に関しては許してほしい。ボクは彼の相手が得意ではないのだから。もちろん、嫌っているわけじゃないんだけど……。

「キミが出てくるなんて珍しいね。ちょうどいいから、こっちも手伝ってもらえると助かるんだけど」

「私は私で準備があるからねぇ。やることも多いんだよ？　こっちまで来たのは偶然

さ。もっとも、偶然来てみれば情けない男がいたものだ」
それはボクのことかな？　などと訊くまでもない。
確かに、客観的、俯瞰的に見れば、ボクは情けなく、無力な男なのだろう。無論、知っているとも。
「それは悪かったね」
皮肉でもなく、事実としてあることは受け入れなくてはならない。
「やれやれ。ロマニのその在り方もどうかと思うよ？　それとね、心配するのもいいが、彼女たちはそう弱くない」
「どうしてそう言いきれるんだい？」
「まったく……もっと人のことを見ることをお勧めするよ。彼女たちの目をね、チラッと見えたんだけど。あれは強い目だね。現状の理解をしてなくても、どうにかしようと動けるタイプの目だ。キミとは違うけど、彼女たちも止まらないだろうね」
「だからかい？」
「だからさ。わかったら、自分のするべきことを思い出したまえ。そのために、キミは足掻いてもがいて、いまも走り続けているんだろう？」
こちらの返事も聞かずに、彼はこの場から去っていく。
言いたいことだけ言い残し、やはりこちらに手は貸さず。見えないところで準備はし

ていてくれるだろうが、今回は準備の方が大切らしい。

「やるべきこと、か……」

正直、これまではなにをするべきかなんてまるでわからなかった。

必要になる可能性のある事柄にはすべて触れてきた。時間の許す限り、すべてを学んできた。人として、一からだ。

「機器の修理、扱い。周りのみんなへの指示……マスターである立・香ちゃん、サーヴァントになりたてのマシュのメンタルケア、付近の状況の整理及び説明――」

息をひとつ吐き出し、心を落ち着ける。昔ではあり得ない行動。いまだからこそできること。

「――よし」

顔を上げ、辺りを眺めれば、指示を待つ、いまも出した指示通り必死になり作業するみんなの姿が目に映る。

だいじょうぶ。

もう一度、自分に言い聞かせる。

だいじょうぶ。ここにはまだ、みんながいる。現場には、信頼できる同僚が、抱える恐怖すら押し殺してマスターを守っているはずだ。少女たちが頑張っているのを、大人のボクが見ているだけなんて許されない。

後ろには、イカれているけど頼もしい彼も控えていてくれるはずだ。そのうち、おかしなものでも発明して持って来るのだろう。その相手は、ボクとマシュ、立香ちゃんでなんとかしなければ。

「だから、戻ってきてくれよ」

培ってきた知識だって、きっとどこかで役に立つはずだ。人との距離感は、まあ……立香ちゃんたちにどうにかしてもらおう。なにごとも適材適所だ。

「みんな、聞いてくれ。これよりボクたちは、残ったマスターである立香、そのサーヴァントたるマシュを最大限バックアップする。これより、しばらくの間はボクがみんなに指示を出し続ける。どうか、彼女たちの力になってくれ」

いまだ敵の姿は見えないが、それでも――いや、だからこそボクは止まらない。

やるべきことがわかったいまなら、これまで以上に頑張れる気がするから。

不思議だ。

無事に立香ちゃんとマシュとの通信が開始されてからしばらく経ったが、彼女たちを見ていると、そう思ってしまう。

この不条理に、悪意に、どうして前を向いて立ち向かえるのだろう。

震えているのは、モニター越しでもわかる。
逃げ出したい、わけがわからない。
純粋な恐怖も、痛みだって味わったはずだ。
「どうして、キミたちは折れないんだい？」
非日常とは縁遠い、多くを知らない、ただの少女たち。正直に言ってしまえば、二人が逃げ出そうと、諦めようと、ボクたちは誰一人、彼女たちを責められない。
誰も、文句は言えないんだ。
一般人だったはずだ。
戦闘は苦手だったはずだ。
なのに、彼女たちはいまも前を向き、その瞳は、わずかな希望を探している。
「なぜ……」
わかっている。
立香ちゃんとマシュが頑張ってくれなければ、この先がないことは、重々承知している。だからこそ、二人のバックアップを最大限すると決めたのではないか。
でも、理解できない。
「困難だと知っていて、危険だとわかっていて、なんで歩みが鈍らないんだ？」
それはボクにはないものだ。

感じられないものだ。勝てると判断できなければ。危険を回避できると確証を得られなければ。

すべての不安を拭わないと進めないボクには、決して真似できない。

「キミたちの目には、なにが見えているんだい？」

初めて、他人の見る世界が気になった。

これまでは、そんなことを考える余裕がなかったのもあるが――もちろんいまもないけどね！――それ以上に、他人と関わること自体が怖いというのもあった。

それが、この緊急事態のときに気になる日が来ようとは。

恵まれているのかいないのか、判断に困るところだね。立香ちゃんとの出会いも、マシュと過ごすことになった日々も。

すべてを見通すことはできないから、きっと偶然なんだろうけど、彼女たちと事前に知り合えていたことは、ボクにとって幸運だった。

「なにせ、キミは少し楽しそうだからね」

途中で再会できた所長――オルガと立香ちゃんを守りながら進むデミ・サーヴァントとなった彼女は、緊張状態にありながら、地獄のような光景を目にしながら、僅かばかりの好奇心が見え隠れしている。

「だからマシュ。無事帰ってきて、その冒険をボクに聞かせて欲しい」

なにを話してくれるのだろう。

なにも知らなかった、まるで赤子のような彼女は、マスターと冒険をすることでなにを学ぶのだろうか。

悪意の中。殺意の中。地獄の中。

人がいるべきでない環境を通してなお、彼女はなんらかを探してくるだろう。見つけてくるのだろう。

「まるで直感スキルでも持ってるみたいだな……」

ありえない。

この身はサーヴァントではなく、人間だ。それも、なんの取り柄もない。であるのなら、スキルなぞ使えるものか。これは人らしい関係の築き方の末に得た、人を知る、知っているという事実に基づいた感覚だ。

「Ｄｒ．ロマン！　呑気にお茶なんて飲んでないで！」

「失礼な！　飲んでいるのはコーヒーだ！　しかも甘いぞ！」

「どちらでもいいです！　さっさと作業に戻ってください！　いつまでモニターを見てるつもりですか！」

「モニターを見てるのは仕事なんだけど!?」

手を止めていたのは認めよう。甘ったるいコーヒーを飲んでいたのも認める。でも、

今回はサボっていたわけじゃないんだ！
なんて声を大にして言ったところで、冷ややかな目で見られるんだろうなぁ……。
所長にも出会い頭に文句言われたし。
ずいぶんな役じゃないか、ボク。
「これでも精一杯頑張ってるんだけど、みんなボクには厳しいよね」
出会って間もない立香ちゃんですらきついこと言ってくるからなぁ。年頃の女の子が三人も揃うとついていけない部分が出てくるから恐ろしい。
にしても、ここまで休まず動いているのが常だとしても、気を張り巡らせての長時間活動は久々だな。
それこそ、ボクが私として彼と駆け回った頃ですらなかったことだ。
「筋肉痛の心配はないけど、無理してないと気絶しそうだな……なにかいい効率を考えないと。最悪、立香ちゃんたちのナビもシフト制にした方がいいかもしれない。彼女とマシュなら、残っている誰が相手だろうと、変わらず話せるだろうし」
シフト制になれば、スタッフ一人一人の負担は増えるが、休める時間も大きく変わる。
いずれは精神的余裕を作り、最善の環境を形作るだろう。
「というわけで、どうですかね所長」
思いついたことをそのまま話してみると、

『却下よ。この緊急事態に休憩？　こっちはいつ襲われるかわかったものじゃないのに!?　あなただけサボろうとしても、そうはいかないわ！　だいたい――』

文句の嵐だった。途中から聞いてなかったけど、一通りバカにされ、貶された気がする。

場の空気を明るくする軽い冗談じゃないですか。

ここにレフがいてくれれば、ボクも少しは気楽になれたんだが……彼がいないのは――いいや、生存が絶望的なのはよくわかっている。だからこそ、こうして似合わないと思いつつも指揮まで取っているんだ。

現在生き残っているカルデアの正規スタッフは２０名足らず。ボクより上の階級の千生存者はゼロ。

レフ……キミは管制室でレイシフトの指揮をとっていたね。あの爆発の中ではとても……オルガの機転により、他のマスター適正者は冷凍保存されたまま生かされている。もっとも、状況的には死んでいるも同然だが。

っと、話がズレそうだ。

しっかりサポートしてないと、また怒られちゃうね。

「――なに？　みんな、聞こえてる!?　すぐにそこから逃げるんだ！」

戦闘後、三人で話し込んでいたが、口を挟まずにはいられなかった。

「まだ反応が残っている！　しかも、これは――」
『な――まさか、あれって!?』
　画面の端で、影が揺らめく。
「間違いない。そこにいるのはサーヴァントだ！　戦うな立香ちゃん、マシュ！　キミたちがサーヴァントと戦うのはまだ早い！」
『そんなこと言っても逃げられないわよ！　マシュ、戦いなさい！　同じサーヴァントよ、なんとかなるでしょう!?』
　バカな！　同じ？　そんなはずがない！
　それはボクが一番よく知っているはずだ。なまじ力を授かったばかりのただの少女と、真になるまで上り詰めた存在が同じはずがない！
「マシュ、戦うな！」
『……いいえ、ドクター。私は……最善を尽くします！』
「なっ――……わかった。立香ちゃん、どうかマシュを支えてあげてくれ。いま彼女に戦う力を、勇気を与えられるのはキミだけなんだ」
『はい！』
　そうだった。
　彼女たちは止まらない。

強大だとか、経験だとか、関係なしに進むんだった。
なにが一番よく知っているだ。
「真の英雄なら、この程度の無理は通してこそ。だったね」
でも、だとしたらやはり、運命は残酷だ。
彼女はなにも知らない少女だった。無垢で、無知で。ボクでない私が見たのなら、羨ましく思っただろうと考えるほどに、彼女は普通だったんだ。
「なんの因果で、こうなっちゃったのかな」
けれども、前は向いていよう。
立香ちゃんが、マシュが示してくれる道を、ボクなりに追っていこう。
震える少女の背中が。頼りなく揺れるマスターが。
ボクの知っている限り、その主従の姿は正しくないけれど。英雄も、マスターも半人前がいいところだけれど。
あの日のボクらとは似ても似つかないとしても。
「救ってくれ。なにもかも、完全に。それでキミたちは英雄だ」
誰に望まれなくても。
キミたちが思っていなくても。
モニターの向こうで続く戦闘は、かろうじてだが、マシュが敵サーヴァントを押し返

している。
必死になり、退けようと。いいや、勝ち抜こうともがいている。
「ボクはキミたちにすべてを賭けた。前を向くと決めた」
これまでのすべては、このときのためにあったのだと自覚した。無理は通そう。無茶もしよう。この身で出来ることは、補えることは可能にしよう。
だからどうか、手伝いをさせてくれ。
煩わしくても。
うざったくても。
心配性で、楽観的だとしても。
「ボクの知識が、技術が、少しでも役に立つのなら。立香、マシュ。ボクが――である限り、ボクはキミたちを支援する」
たとえ、その結末がどこへ向かおうとも。
モニターには、辛くも勝利を収めたマシュが、マスター立香と並び立っていた。

協力者来る

みんなに望まれるまま、できることはすべてやった。
自分のためにできることなど、なにもなかった。
気づいた頃には、手遅れで。気づくことは、傷つくことだと、後になって知った。
ロクデナシの、ひとつ残った願い。
叶えられた先にあった、戸惑いと困惑。初めて手にする、人間としての感性。
すべてを周りからのみ求められた者。
それが終わろうと、いまだボクには求められる。
時間を奪い去ろうと。
平穏を脅かそうと。
結局、ロクデナシは求める者にはなれないとしても。
せめてこれが、悲しい物語にはならないように。
簡単に手に入る言葉が、手に入らないとしても。
どうか、人間が手を取り合い、助けられ、助け、汚れなき明日をつかめるように——。

困ったな。
確かに撃破した……したけど、同系統の反応がもうひとつ。
この街では、サーヴァントが既に召喚されていたってことか。
「そうなる可能性なんて、ひとつしかない」
より詳しく言うのなら、ボクはひとつしか知らない。だとしたら、状況はなにもよくないぞ。
『ああ、もう！　どういうことよ、なんでサーヴァントがいるの!?』
みんなに逃げろと言ってから、必死になって走っていた所長が叫ぶ。
「恐らくですが、聖杯戦争です、所長。その街では、聖杯戦争が行われていた」
『まさか……』
「本来なら冬木で召喚された七騎による殺し合いだけど、そこはもうなにかが狂った状況なんだ！　マスターのいないサーヴァントがいても不思議じゃない。そもそも、大前提として、サーヴァントの敵はサーヴァントだ！」
敵がいれば襲ってきても不思議じゃない。
昼も夜も関係なく手を出してくる輩はいるし、手段を選ばない者だってもちろんいる。
『……じゃあ……私がいる限り、他のサーヴァントに狙われる……？』

『マシュは聖杯とは無関係でしょう！　アレはただの、理性を亡くした亡者よ！』
そう、マシュは聖杯によって呼ばれたわけじゃない。もとより、サーヴァントであったわけでもない。正規の聖杯戦争であれば、狙われる道理はないのかもしれない。
けれど、違うんだ。
「キミたちは争いへと介入してしまった。であれば、敵からしたら、紛れもなく当事者だよ」
勝ち抜くことが最善の道なんだけど、マシュ一人では明らかに厳しい。
『――見ツケタゾ。新シイ獲物。聖杯ヲ、我ガ手ニ！』
話しているうちに新しい反応か!?
「サーヴァント反応、確認！　そいつはアサシンのサーヴァントだ！」
『……っ!?　応戦します！　先輩、私を使ってください……ッ！』
『わかった、絶対に勝たせてみせる！』
ああ、もう！　次から次に、マシュを休ませる時間すらよこさないつもりか？
『――はい。あなたに勝利を、マスター！』
「連戦で済まないが、みんなを守ってくれ、マシュ！」
つくづく思うな。
あの場に、自分も行けたらと。

もちろん、このボクがいったところで、ある程度の助けにもならないだろう。でも――いいや、もっとダメだ。管制室からボクまでいなくなったら、それこそ瓦解するだろう。

助けになる手段を持っていないとは言わない。彼女の、立香ちゃんの助けになることもできるだろう。少し弱いかもしれないが、それでも経験というものもある。

「でも、まだそのときじゃないんだよね」

自身から発せられる冷たい声音。

何者かが手を引いていることは確定。誰かもわからないうちに、切れるカードを切ってしまうのは悪手だ。

「ごめんよ、マシュ。でもどうか、任せ――」

反応がひとつ、三人のところへと移動してきている！

「立香ちゃん、追いつかれた！　もう一体のサーヴァント、そっちが本命だ！」

『そんな……一体でも敵わないのに、二体同時に襲ってくるの!?』

所長の顔色が曇る。

当然だ、アサシン一体に対してすら、マシュは満足に戦えていなかった。そこにもう一体加わったりしたら――。

『決メルゾ、ランサー。ドコノ英霊カ知ラヌガ、御首二ハ違イナイ』

『――ハ。ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！』

狂ってる……これは話し合う余地もなしだ。

「所長、マシュ、しっかりするんだ！　足を止めちゃいけない！」

モニターの向こうでは、フォウも懸命に彼女たちに声をかけている。が、狂ったサーヴァントの姿に、状況に、完全に冷静さを失っているようだ。

「くそっ、二人とも飲まれてる……指示を出すんだ、立香ちゃん。冷静なのはキミしかいない！」

『……いまは逃げるしかない！』

マシュに、所長に聞こえるように声を上げる立香ちゃん。

『先輩！』

『面白イ、面白イ面白イ面白イッ！』

マシュが反応を示した直後。

その隙を、ランサーのサーヴァントは見逃さなかった。

「マシュ、避け――」

『く、っぁ……』

言葉はそれ以上、続かなかった。

逃げ出した矢先、マシュの背後へ到達したランサーによって、マシュが吹き飛ばされ

た。

『面白イ。殺シタイ。逃ゲル背中ホド、美シイ！』

そのままマシュの元へと歩いて行き、握る薙刀を頭上に掲げる。

「くっ……！」

つい立ち上がるが、どうしたところでなにもできない。わかっているさ、そんなこと！

でも、でも！

彼女と過ごした時間がある。

彼女に色々と教えてきた思い出が残っている。

「――――……ごめん、少し席を外すよ！　変わらず立香ちゃんとマシュのサポートは頼んだ！」

「Ｄｒ．ロマン！　あなたはどうするんですか!?」

管制室を出て行こうとするボクを止める声。

「どうするって、みんなを助けるために――」

時間のない中、振り返って声を紡ごうとすると、モニターに映る光景は変わっていた。

『ヌゥ……何者ダ!?』

どういうわけか、マシュの側へと迫っていたランサーが押し戻され、アサシンまでも

が動きを制限されていた。
『何者って、見ればわかるだろご同輩。なんだ、泥に飲まれて目ん玉まで腐ったか？』
青髪の青年が物陰から姿を表す。
「まさか、彼が……？」
「Ｄｒ．ロマン、さあ、席に戻って。あなたの仕事は、ここで彼女たちを助けることでしょう？」
ボクがしようとしていたことを知る由もないはずのスタッフは、ボクに優しく声をかけてくる。大方、マシュがやられそうになってパニックに陥ったとでも思ったんだろう。
都合のいいことだ。嘘を重ねるのは悪いかもしれないが、甘えさせてもらおう。
「ああ、そうだったね。ごめん、ちょっとびっくりしちゃって。すぐに戻るよ」
再びモニターの前に腰を下ろし、周囲を見渡す。
『貴様、キャスター！　ナゼ、漂流者ノ肩ヲ持ツ……!?』
ランサーのサーヴァントが青髪の青年へと問いかける。
言葉からして、彼もサーヴァントのようだ。キャスター……キャスターか。そうか、キャスターかぁ……。
『あん？　テメエらよりマシだからに決まってんだろ。それとまあ、見どころのあるガ

キは嫌いじゃないんでね』
そう答え、キャスターと呼ばれたサーヴァントはマシュを立たせる。
『そら、構えなお嬢ちゃん。腕前じゃアンタはヤツに負けてねえ。気を張れば番狂わせもあるかもだ』
『は、はい！　頑張ります！』
味方、か。
よかった。とりあえずよかった！　進にしろ、待つにしろ、マシュ一人ではつらいところだったんだ。
「本当に、よかったよ」
これなら、ボクは冷静でいられそうだ。
ここから出て行くこともないだろう。現地で戦力が増やせるなら、必要ない。
『お嬢ちゃんがマスターかい？』
聞かれ、立香ちゃんが首を縦に振り、肯定する。
『そうか。なら、指示はアンタに任せようか。オレはキャスターのサーヴァント。故あってヤツラとは敵対中でね。敵の敵は味方ってワケじゃないが、いまは信頼してもらっていい。一人で健気に戦っていたあのお嬢ちゃんに免じて、仮契約だがアンタのサーヴァントになってやるよ！』

キャスターはそう伝えると、前を向く。
だが、その間に、聞こえるか聞こえないかの声量で何事かを口にした。
『信じがたいことに、情けない声が言ったのさ。お嬢ちゃんを助けてくれってな』
たぶん、この言葉が聞こえていたのは、ボクだけだっただろう。

その後、キャスターの助力により二体のサーヴァントは撃破された。
『あ、あの……ありがとう、ございます。危ないところを助けていただいて……』
『おう、お疲れさん。この程度貸しにもならねえ、気にすんな！　それより自分の身体の心配だな。ケツのあたり、アサシンのヤロウにしつこく狙われてただろ？』
『ひゃん……!?』
『おう、なよっとしているようでいい体してるじゃねえか！　役得役得っと。なんのクラスだかまったくわからねえが、その頑丈さはセイバーか？　いや、剣は持ってねえけどよ』
キャスターの彼は気さくな性格をしているようだ。
もっとも？　ただのエロオヤジにしか映ってないけどね！
『……ちょっと、立香。アレ、どう思う？』
『まごうことなきセクハラオヤジだと思います』

他の女性陣も大方同じ見解らしい。まったく、羨ま……けしからん！
「とは言え、とりあえず事情を聞こう。エロオヤジなのは間違いないが、彼はまともな英霊のようだし」
『おっ、話の早いヤツがいるじゃねえか。なんだオタク？　そいつは魔術による連絡手段か？』
キャスターが話しかけてくる。
久々のサーヴァントとの会話だな。あ、違うや。少し前に彼と話していたっけ。彼とは慣れたものだが、初対面の英霊にはそれ相応の態度で臨まないと！
「はじめまして、キャスターのサーヴァント。御身がどこの英霊かは存じませんが、我々は尊敬と畏怖をもって、」
『ああ、そういう前口上は結構だ。聞き飽きた。てっとり早く用件だけ話せよ軟弱男。そういうの得意だろ？』
「うっ……そ、そうですか。では早速……軟弱……軟弱男とか、また初対面で言われちゃったぞ……ちょっとへこむ……」
『早く話せよ』
「は、はい。では――」
おっかしいなぁ。最近の英霊というのは、ああした態度で接するのを拒むのか。

確かに、すべての英霊が好むわけではないだろうが。にしても、軟弱か。まあ、仕方ないよね。そっち方面に特化した性能をしていたわけでなければ、この身はただの人なんだから。

でも、トレーニング量、増やそうかな……。

やはり、現地のサーヴァントの協力を得られるのは大きいな。

モニターを眺めながら、ボクはそう思っていた。

「なにより、経験の多い英霊ほど、マシュにとっても影響は強いんじゃないかな」

戦い方もだが、彼らの話は普通に聞いていても楽しいものだろう。糧になるだろう。マシュには必要なモノだ。

まあ、戦力としても大分頼りにしたいんだけど。

マシュ一人に立香ちゃんと所長を守ってもらいながらの戦闘は早い。早過ぎる。

できることなら、キャスターの彼に導いてほしいところなんだけど……なんか荒行事になりそうで頼むに頼めないんだよね。

けれど。

『……』

マシュが黙り込み、見るからにへこんでいるいまぐらいは、彼を頼ってもいいのではないだろうか。

『ちょっと、立香。キリエライト、見るからに落ち込んでいるわよ？　あなた、一応マスターなんだから、ケアしてあげなさいよ』

所長もマシュの変化に気づいたのか、それとなく立香ちゃんに伝えていた。

ひとつ頷いた彼女は、歩く速度を落とし、マシュの隣まで移動する。

『……やっぱり、アレ？』

静かに問うと、

『……はい。私から宣言するのは情けないのですが……』

時間をかけ、マシュは口を開く。

『その、私は先輩の指示のもと、試運転には十分な経験を積みました。なのに……私はまだ宝具を使えません。使い方すらわからない、欠陥サーヴァントのようなもので……』

聞いている間、所長がボクを見てくる。

マシュの位置からは見えないところで、口だけを動かして。

ふぉ　ろ　お　し　ろ

一文字ずつ見ていくと、なるほど。フォローしろ、か。

任せてほしい。こんなときこそ、ボクの楽観的思考が役に立つものさ！

「ああ、そこを気にしていたのか。マシュは責任感が強いからなぁ……でも、そこは一朝一夕でいく話じゃないと思うよ？　だって宝具だし。英霊の奥の手を一日二日で使えちゃったら、それこそサーヴァントの面目が立たないというか」

『あ？　そんなのすぐに使えるに決まってるじゃねえか。英霊と宝具は同じもんなんだから。お嬢ちゃんがサーヴァントとして戦えるのなら、もうその時点で宝具は使えるんだよ』

ちょっと!?　ボクの話に重ねて言うのやめてもらえるかな！　本来ならボクの出番これだけで奪われてるからね!?　フェードアウトしてるよ、これ！

しかも所長は所長で仕方ないわね、ロマニじゃ……みたいな顔するのやめてもらいたい！

『使えないってコトぁ、単に魔力が詰まってるだけだ。なんつーの、やる気？　いや、弾け具合か？　とにかく、大声をあげる練習をしてねえだけだぞ？』

『そうなんですか!?　あ……そーうーなーんーでーすーかー!?』

『ちょっと、いきなり大声出さないで！　鼓膜が破れかけたわよ、本気で！』

そうこうしているうちに、キャスターとマシュの会話は続いていく。ボクの話は完全スルーだね、わかるとも！　というか、マシュの大声が聞こえた辺りから、スタッフが何名か頭や耳を押さえてるな。

「なんでＤｒ．ロマンは平然としているんですか……」
「あはは、そこはそれ。決してライブ会場ではっちゃけた経験が活きているわけじゃないよ」
「……なんでこの人が医療部門トップなのかしら？」
「酷いなー」
　いや、本当にボクの扱い雑になってきたね。
『まあ、やる気が出たのはいいことさ。立香、お嬢ちゃんがこう言ってるんだ。少しばかり寄り道して構わねえな？』
『寄り道って？』
『なに、ただの特訓だ。すぐに終わる。いまのオレはキャスターだぜ？　治療なら任せておけ』
　目を離した隙に話が進んでいる!?
「治療なら任せろって、怪我する前提の話だよね……」
『どうだろうな？　さて、まずは厄寄せのルーンを刻んでだな……よし』
『え？　なにしてるのあなた。なんで私のコートにルーンを刻んでいるの？』
　見ている限り、危なくはなさそうだけど……ん？　厄寄せ？
『あんたなら、狙われても自分でなんとかできるだろ。ほら、来たぜ』

キャスターの指差す先。そこにいたのは――

「うん。どう見ても敵だね！　しかも、全個体所長に向かって来てるぞ！」

『意味がわからないんですけどー!?』

『しょ、所長、私の後ろに！　先輩も、戦闘準備お願いします！』

慌てふためくオルガを立香ちゃんが引っ張っていきながら、入れ替わるようにマシュが前に出る。

『よしよし、こんだけ集まれば十分だ』

一人楽しそうにしているキャスター。

「いったいなにを……」

『あ？　つまるところ、宝具ってのは英霊の本能だ。なまじ理性があると出にくいんだよ。なんで、お嬢ちゃんにはまず精も根も使い果たしてもらうって寸法さ！　冴えてるな、オレ！』

『もしかしてバカなんですか!?　ううん、バカだ！』

まったくだ！　そして立香ちゃん、キミ、英霊相手に中々言うね！　よくぞ言ってくれた！

できれば、こんな荒療治みたいなことは避けたいんだけど。

波のように押し寄せてくる敵に立ち向かう少女を眺めながら、多くのことを思う。

思ってしまう。
あれはただの少女だと。
戦うために生きているのではないのだと。
「覚悟が足りないのはボクなんだとわかってはいる。でも――いや、だからこそ。頑張ってくれ、マシュ」
力が足りなければ守れない。
手札が尽きれば負ける。
そんな局面には、割と出くわすことだから。できることを増やすのは悪いことじゃない。たとえ、多少のリスクを背負うとしても。
もちろん、ボクはリスクを背負っての行動は避けたいんだけどね。一応、キャスターも見守っててくれるわけだし。英霊にまで上り詰めた相手だから、どうするかは微妙なラインだけ。本当の本当に危ないときは、迷わず助けてくれるだろう。
『限界、です――これ以上の連続戦闘、は――すいません、キャスター……さん……こういった根性論ではなく、きちんとした理屈にそった教授、を――』
かなりの時間が経ち、さすがにマシュも限界が近い。
これまでかなり頑張ったと思うけど、しかし。

『わかってねえなぁ。こいつは見込み違いかねぇ』
キャスターは納得がいかないようで、マシュの提案など聞いてもいないようだ。
『まあ、いいか。そんときはそんときだ。んじゃ、次の相手はオレだ。味方だからって遠慮しなくていいぞ。オレも遠慮なしで立香を殺すからよ』
『っ……!?』
『なに言ってるのあなた、正気!?　この特訓に立香は関係ないでしょう!?』
マシュがすぐさま体勢を整え、所長が抗議の声をあげる。
でもたぶん――。
『サーヴァントの問題はマスターの問題だ。運命共同体だってーの。おまえもそうだろ、立香？　お嬢ちゃんが立てなくなったときが手前の死だ』
『マスター、下がって、ください……私は、先輩の足手まといにはなりませんから！』
呼吸を整えるマシュ。
対して、キャスターの言っていることは正しい。サーヴァントが絡んでくるのなら、その通りだ。
でも。
『そうこなくっちゃな。んじゃ、まともなサーヴァント戦といきますか！』
「どうしてこう、勝手かな。英霊って奴は、誰も彼も！」

戦闘になったら、どう考えてもマシュが不利じゃないか。だいたい、立香ちゃんを失った時点でボクらは終わりだ。ああ、始めないでくれ！

って、もう遅い!?

『さて、行くぜお嬢ちゃん！　主人もろとも燃え尽きな！』

キャスターが詠唱に入る――ってそれ宝具だろ！

『破壊するはウィッカー・マン！　オラ、善悪問わず土に還りな！』

行動を見せた直後、キャスターの前方に枝で構成された巨人が召喚される。その巨人は火炎を纏うと、マシュへと向かい出す!?　巨人なだけあって、十メートルを超えるサイズの巨体だ！

『ぁ――あ』

炎の中、マシュのか細い声が聞こえる。

ボクに彼女の思うことはわからない。でも、責任感が強く、マスターを信じている彼女なら！

『ああ、あああぁあああっっ!!』

モニターが炎一色に染まった瞬間。

マシュの咆哮と共に、彼女の構える盾の正面に巨大な結界が張られ出す。青白く光る壁は火炎の進行を阻み、巨人の行くてを遮り、そして。

見事、キャスターの一撃を耐え切ってみせた。
『あ……私……宝具を展開、できた……んですか……？』
へたりこんだマシュを確認したキャスターは、
『へえ。なんとか一命だけはとりとめると思ったが、まさかマスターともども無傷とはね。喜べ……いや、違うか。褒めてやれよ、立香。あんたのサーヴァントになったお嬢ちゃんは、間違いなく一線級の英霊だ』
笑顔を見せながら、マシュの成長を喜ぶキャスター。
ボクとしては、マシュが宝具を展開したことより、その表情を見せることの方が驚きだった。
英霊になっても、子どもの成長は嬉しいものなのか。
『先輩……私、いま……！』
『うん、凄かったよ、マシュ！』
両手を広げて、マシュへと駆け寄る立香ちゃん。そのままマシュを抱きしめる。
『っ……！』
『フォウ、フォーウ！』
フォウも彼女に続くように、マシュへと向かっていく。
二人とも、嬉しそうだね。そんな光景見せられたら、意識がそっちに集中しちゃうよ。

「……驚いたな。こんなに早く宝具を解放できるなんて。マシュのメンタルはここまで強くなかったのに……」

『そりゃ、あんたの捉え方が間違ってたんだよ。お嬢ちゃんはアレだ。守る側の人間だ。鳥に泳ぎ方を教えても仕方ねえだろ？　鳥には高く飛ぶ方法を教えないとな』

ボクの疑問に、キャスターが答えてくれる。

守る側……それは。

それはボクが知らない在り方だ。

誰かを守る。守り通す。

できるわけがない。そもそも、そんなやり方は知らなかったのだから。でも、ボクの関わった少女がそれをできるのは、なんだか眩しいな。

眩しくて、それでいて、ほんのちょっぴり、誇らしい。

なにもしていない。精々、あたりさわりのないことを教えただけで。少しばかり、生きる手伝いをした程度だろう。

なのに、彼女の成長が、彼女の在り方が、どこか嬉しいんだ。

「これも人間らしい、ってことなのかな」

口から漏れた言葉は、誰にも聞かれず溶けていく。

まだ、なにも終わっていないけれど。解決していないけれど。

ああ――どうか、彼女の成長を。マシュの隣を歩んでくれる立香ちゃんとの二人の物語を。

この先の未来を。

できることなら、ずっと見守っていきたいものだ。

どうか、ずっと――。

大切なモノとは

なにかを大切に思うことは難しい。

けれど、大切な物がなにであったかを知ることは容易だ。

なぜなら、大切な物は本能的にわかっているのだから。

それでもなお、大切な物を手中に収めておくのは困難だ。

だって、そこに見えているうちは、大切だとは思わないのだから。無くして初めて、大切だったと知るのだから。

そして、いつだって結末は変わらない。

大切にしていた、大切にしたかったモノほど、この手から滑り落ちていくのだから……。

覆す方法があるとするなら、それはきっと、とても残酷な手段なんだろう。

例えば、大切なモノしか残せないような、そんな――とても意地の悪い方法だったり、するんじゃないだろうか。

見応えあったな。

うん、実に見事だった。それにしても――。

「まさか弓を使わない弓兵がいるなんて、思ってもみなかったよ」

先ほど、事態の収拾を図るために洞窟を進んでいたときに出くわした赤い弓兵のサーヴァント。マシュとキャスターにより撃破することはできたが、変わったサーヴァントだったな。

危うい場面もあったけど、マスターである立香ちゃんを守りつつ戦えた。

「マシュの成長は早いなぁ……立香ちゃんもだけど、最近の人間は見れば見るほど、強く映るよ」

誰しもがそうであるわけではないが、くり抜いて見れる現実は、二人の少女の強さをより感じさせる。あとは所長がカルデアに戻ってきてくれさえすれば、なんとかなるだろう。

そうなれば、ボクはまた、ただの医者に戻るだけだ。もちろん、今後も緊急の事態に備えて知識を蓄えることは忘れないけどね。もはや日常だし！

どうにも、こればかりは治らない。

仮にすべてが終わろうと、また新しい知識を求めてそうで怖いな、ボクも。

「でも、あと少しってところだね。気を抜けない時間が続くけど、それももうじき終わり

だ」
カルデアはじき、本来の姿を取り戻す。
所長の帰還、マスターとサーヴァントの関係を築いた立香ちゃんとマシュ。残ったスタッフのみんな。少ない。あまりに少ない人数だが、立て直しという面では、なんとかなるギリギリを保った。
モニターの向こうで楽しげに談笑する少女たち。
鍵になるのは――わかっている。
すべてを押し付けることになる。
すべてを抱え込ませることになる。
それでも。
「ボクには力がないからね。表舞台に立つのはキミたちになってしまうだろう……」
正直に言えば、いまだって納得はしていない。
けれど、納得はできなくても理解はしているつもりだ。
「表には出れないぶん、裏方に専念させてもらおうかな……医者にだって、裏方を務めるくらいの役割が振られていても、バチは当たらないさ」
最後の休憩を満喫しているらしいみんな。
珍しいことに、所長が立香ちゃんとマシュを褒めていた。

「なにか甘いものでも食べたのかな？」
『ロマニ、無駄口を叩く余裕があったら立香に補給物資の一つでも送りなさい。本人が頑張っているのに、装備不足で失敗するなんてかわいそうじゃない』
　ほう。
「かわいそう、とはお優しい。これはもしや、所長にもようやく心を許せる相手が？」
『バ……！　あ、哀れでみじめって意味よ！　そんなこともわからないの!?』
『えぇ……所長ひどい……私たちの好感度ってマックスじゃなかったんですか？』
　所長のボクに対しての言葉に、立香ちゃんが落ち込む。
『ち、違……いまのはそういう意味じゃなくて！』
　いやいや、たったいま意味を述べたよね。
「いやあ、いつ見てもいいものですね、少年少女の交流というものは。少女というには所長はちょっとアレですが」
『そうでしょうか？』
　マシュが疑問を抱き、視線を所長へと合わせる。
『所長は確かに年上ですが、趣味嗜好はたいへん近いものを感じます。親愛を覚えます』
『なに言ってるのあなた!?　あんたたちなんて私の道具だって言ってるでしょ!?　というか、立香は私に抱きついてこないで！』

ああ、微笑ましい。
なんか、所長の隣にいてはいけない生物が同意しているように見えるけど、微笑ましい。
『ほら見なさい。こんな黒っぽくて怪物みたいのさえ同意してるじゃない！』
そっかー。やっぱりそこにいるのか、それ。
仕方ない。
「所長、貴女が話しかけているのは――」
『あひぃいいい!?　マシュ、早く排除して！　食べられる、食べられる！』
『しょーちょーおー」
『やめて、離して立香！　さっきのことなら取り消すから、早く逃げさせてぇぇぇぇっ!!』
立香ちゃん……キミ、やっぱり恐ろしい子だね。
ここまで所長と打ち解け、仲良くできるなんて、ちょっと驚きだ。
『ハハッ、中々楽しいじゃねえかよ。最近戦闘行為しかしてなかったせいか、こんな光景も悪かねえな。なあ、軟弱男。おまえさんもそう思うだろ？』
キャスターが加勢するでもなく、見守る立ち位置で話しかけてくる。
「うん、よく思うよ」

『だよなぁ。で、あのお嬢ちゃんたちが、おまえさんにとって大事なものなのかい？』
「へ？」
『とぼけんなよ。俺は確かに聞いたぞ？』
　聞いた？　なにをだろうか。少なくとも、ボクの事情は話していない。それどころか、こちらの事情すらロクに話してはいないと思うが……けれど、間違ってはいない。
「ええ、確かに大事ではあります。カルデアにとって、立香ちゃんは現状最後のマスター適正者ですからね。マシュにしても、マスターと意思疎通のできるサーヴァントは貴重です」
『はあ……マジかよ』
　なんだろう？　なぜか呆れたような顔をされたぞ？
『オレが聞きたいのは、組織としてどうかじゃねえよ。あんた本人がどう思ってるかだ。ったく、お嬢ちゃんたちを導ければいいかと思っていたが、こんなところにも迷子がいるとはな』
「ボクがかい？　いや、この年齢で迷子はないだろう」
『本気で気づいてないのか？　おまえさん、立派な迷子だぜ。なんつーか――いや、やめておこう。でもな、ひとつだけ言わせてもらうぜ』
「……聞きましょう」

『自分の在り方を見直すことをお勧めする。あとな、手前の大切なモノくらい、わかるようになっとけよ』

どういう意味だろう。やはり、聞いてみてもわからない。

理解できないんじゃない。しっくりこない。

「大切な、モノ……？」

この▪身にそんなものがあっただろうか？　これまで生きてきて、大切に思う物が出来た記憶がない。

あれか？　もしかしてマギ☆マリだったり？　いやー、やっぱりそうなるかぁ。そうだよねぇ。あそこまではまったものなんてそれくらいしか――。

『考えてるところ悪いが、たぶんいま思い浮かべてるものは違うと思ぞ』

「バカな……」

ボクのマギ☆マリが大切なものにカウントされないだと？　それはおかしいというか、むしろキャスターの見識がよろしくないわけで。

だいたい、大切なものなんてすぐさま思い浮かぶようなものじゃないと思いたい。

もうひとつの理由としては、それを探している暇もなかった。というところにあるのだが、まあ、これは話す必要もなければ、話したいとも思わない。

『ったく、ここまでの大バカ野郎は久々に見たぜ』

額に手をやりながら、心底面倒そうにキャスターは言う。
『元はといえば、オレになっさけない声が届いたのが始まりなんだよ。お嬢ちゃんたちに協力しているのは利害に一致からだが、助けに入ったのは誰かさんの声が風に乗って聞こえたからだ。もっとも、そいつは自分の言葉すら覚えてないみたいだがな。っと、そろそろ加勢してやるか。思ったより雑魚が多いようだ』
ボクとの話を一方的に打ち切り、マシュの元へと向かうキャスター。
はて？　彼は結局、なにを言いたかったのだろう。
「協力し始める前……つまり彼がランサーとアサシンのサーヴァントとの戦闘に介入する辺りかな」
情けない声、ね。
そういえば、キャスターは出会って間もないときにも、なにか言っていたっけ。
えっと……そうだ、キャスターがマシュを助けて、そのまま戦闘続行に移ったとき。
あのときに確か――
『信じがたいことに、情けない声が言ったのさ。お嬢ちゃんを助けてくれってな』
――思い返してみれば、ボソッと言っていたな。
あの状況でそんなことを言うとすれば、現地の立香ちゃんか、もしくは所長くらいのものだろう。情けない声……うん、これは所長かな？　立香ちゃんはなんだかんだで前

を見ているし。
「でも、もし所長でもないとしたら――」
ボクの大切なモノ、ね。
モニターに映る、一組のマスターとサーヴァント。
彼女たちが危機に陥った、最初のサーヴァント戦。そのとき咄嗟に立ち上がり、駆け出しそうになったボク。
周りを信じていなかったはずなのに、いつの間にかいらないことまで話していた。
出会って間もないのに、平気で笑顔を向けていた。
気づけば、彼女たちのことを気遣っていたような……。
そういえば、あのときボクは、なにかを言っていただろうか？

息を吐く暇もなく、戦闘は続く。
ことの究明をするため。また、事態の収拾のために奥へと進んだボクたちを待っていたのは、アーサー王。
なにか変質しているようだったが、紛れもない、ブリテンの王。聖剣の担い手……。
そんな超常の存在が、マシュたちを襲う。

一撃一撃は重く、その華奢な体のどこに力があるというのか。やはり見た目だけではわからない。だが、気になったのは戦闘に入る前にこぼしたアーサー王の言葉。

彼女は確かに、「面白いサーヴァント」がいると言った。また、その宝具は面白い、とも。

「名も知れぬ娘。マシュのことを指したのは明らか」

かの王の言葉だ。

間違っても甘く見てはならないだろう。

が、そのアーサー王も倒された。真相を聞くのは、もう無理だろう。

『聖杯を守り通す気でいたが、己が執着に傾いたあげく敗北するとはな。結局、どう運命が変わろうと、私ひとりでは同じ末路を辿るという事か』

『あ？　どういう意味だ、そりゃあ。テメエ、なにを知っていやがる？』

『いずれ貴方も知る、アイルランドの光の御子よ。グランドオーダー――聖杯を巡る戦いは、まだ始まったばかりだということをな』

どういうことだ!?

なぜ、彼女がグランドオーダーなんて言葉を？　というか、アイルランドの光の御子って……思わぬところで正体がわかるなんて。

『おい待て、それはどういう――おぉう!?　やべえ、ここで強制帰還かよ！』

言葉からして、アーサー王はもう消滅してしまったのだろう。まだ大事なことは訊けてなかった気がするけど、それはそれか。

続いて、キャスターの姿も消え始めているようだ。

『チッ、納得いかねえがしょうがねえ！　お嬢ちゃん、あとは任せたぜ！　次があるんなら、そんときはランサーとして喚んでくれ！　それと、そこの軟弱男！　次に会うときまでの課題だ。オレの言葉、忘れんなよ』

それ以降、彼の声は聞こえない。

キャスターは言いたいだけ言い残し、完全に姿を消したのだろう。

彼の言葉通りなら、帰還したのだろう。

まったく、英霊というのは。

「ああ、覚えておくとも。立香ちゃんとマシュを導いてくれてありがとう、クー・フーリン」

そして、ボクなんかを気にかけてくれて、ありがとう。

『セイバー、キャスター、共に消滅を確認しました。……私たちの勝利、なのでしょうか？』

マシュからも報告が入る。少しぎこちないが、まあ仕方ないだろう。

いままで戦っていた、戦ってくれていた者たちが消え、明確な勝利というものが残っ

ていないのだから。

ここは、明るく笑顔でいかないとね。

「ああ、よくやってくれたね、マシュ、立香ちゃん！　所長もさぞ喜んでくれて……あれ、所長は？」

『……冠位指定……あのサーヴァントがどうしてその呼称を……？』

やばい、なんか考え出してる。

こうなると長いんだよね、オルガは。

『マリー所長、指示は？』

立香ちゃんいったー！　迷いなく指示を仰ぎに行ったね彼女！　遠慮も躊躇いもないとか、コミュ力の塊かい!?

『え……？　そ、そうね。よくやったわ、立香、マシュ。不明な点は多いけど、ここでミッションは終了とします。まずはあの水晶体を回収しましょう。セイバーが異常をきたしていた理由……冬木の街が特異点になっていた原因は、どう見てもアレのようだし』

『はい、至急回収――なっ!?』

マシュが向かおうとした矢先。

『いや、まさかキミたちがここまでやるとはね。計画の想定外にして、私の寛容さの許容外だ。４８人目のマスター適正者。まったく見込みのないこどもだからと、善意で見逃

してあげた私の失態だよ』

『レフ教授!?』

『レフ!?　レフ教授だって!?　彼がそこにいるのか!?」

ここからだとさっぱり見えないんだけど、マシュの言葉通りなら、冬木の街に彼がいることになる。

『うん?　その声はロマニ君かな?　キミも生き残ってしまったのか。すぐに管制室に来てほしいと言ったのに、私の指示を聞かなかったんだね。まったく――どいつもこいつも統率のとれていないクズばかりで吐き気が止まらないな。人間というものはどうしてこう、定められた運命からズレたがるんだい?』

違う……これは、違うぞ。

ボクの知っているレフ・ライノールとは似ても似つかない!

彼とはそれなりに長い時間を共有してきたボクにはわかる。

にこやかに微笑み、優しげのある声。それがなんだ。いまの彼から感じるのは、憎悪にも似た悪意だけだ。

「みんな――」

『――っ!　マスター、下がって……下がってください!』

ボクが静止をかけるより早く、マシュの声が響く。

『あの人は危険です……あれは、私たちの知っているレフ教授ではありません！』

よかった。ひとまず、警戒してことに当たれそうだ。

最初の頃のように冷静さが欠けることなく事態に対処できているね、マシュ。

『レフ……ああ、レフ、レフ、生きていたのねレフ！　良かった、あなたがいなくなったら私、この先どうやってカルデアを守ればいいかわからなかった！』

しまった！　マシュは平気でも、所長が冷静なはずないじゃないか！

『所長……ッ！　いけません、その男は！』

マシュも気づいたのか、駆け出す所長を止めようと声をかけるが、聞こえていないのか、所長は一人、レフへと近づいていったのだろう。

暗いモニターの中で、足音だけがやけに響く。

『やあ、オルガ。元気そうでなによりだ。キミも大変だったようだね』

『ええ、ええ、そうなのレフ！　管制室は爆発するし、この街は廃墟そのものだし、カルデアには帰れないし！　予想外のことばかりで頭がどうにかなりそうだった！　でもいいの、あなたがいればなんとかなるわよね？　だっていままでそうだったもの。今回だって、私を助けてくれるんでしょう？』

『ああ、もちろんだとも。本当に予想外のことばかりで頭にくる。その中で最も予想外なのがキミだよ、オルガ。爆弾はキミの足下に設置したのに、まさか生きているなんて』

『――――――え？』

「なんだって!?」

　爆弾を、設置した……？　彼はいま、そう言ったのか？

『まったく。ああ、でも生きているというのは違うな。キミはもう死んでいる。肉体はとっくにね。トリスメギストスはご丁寧にも、残留思念になったキミをこの土地に転移させてしまったんだ。皮肉なことに、キミは死んで初めて、切望してきた適正を手に入れたんだ。だからカルデアにも戻れない。戻った時点で、キミの意識は消滅するんだから』

　そのまま、立て続けに話していく。

　内容は、残酷にも、依存に近いレベルでレフを信頼していた所長に対してはきついものだった。

『え？　え……消滅って、私が？　ちょっと待ってよ……カルデアに、戻れない？』

『そうだとも。だが、それではあまりに哀れだ。生涯をカルデアに捧げたキミにために、せめていまのカルデアがどうなっているか見せてあげよう』

　管制室から見えるカルデアスの正面の時空が揺らぐ。

　波はやがて大きくなり、ひとつの穴を空間に作り出す。

「あれは……立香ちゃんにマシュ、所長！」

所長とレフがなにごとかを話しているが、ここからではまるで聞こえない。やはり通信ごしでないと！

クソッ、見てる場合じゃなかった！

『まったく――最後まで耳障りな小娘だったなぁ、キミは』

すぐさま通信を再開すると、聞こえてきたのは、無常にも。

『キミの宝物に触れるといい。なに、私からの慈悲だと思ってくれたまえ』

『ちょ――なにしてるの、レフ？　私の宝物って、カルデアスのこと!?　や、止めて！　だって、カルデアスよ？　高密度の情報体よ？　次元が異なる領域なのよ!?』

『ああ。ブラックホールとなにも変わらない。それとも太陽かな。まあ、どちらにせよ、人間が触れれば分子レベルで分解される地獄の具現だ。生きたまま、無限の死を味わいたまえ』

レフによる、▪狂い、嘲るような言葉だった。

『いや、いやいや、助けて、誰か助けて！　私、こんなところで死にたくない！　だってまだ、誰にも褒められてない！　誰も認めてくれてないじゃない！　どうして!?　どうしてこんなことばっかりなの!?』

浮遊させられてきたのか、カルデアスへと近づいていく所長の姿が、ここからでも見えた。

「Ｄｒ．ロマン、なにか手は⁉　所長を救う手はないんですか！」
スタッフの誰かが、そんなことを言った気がした。
でも、無理だ。ボクにはまだ、なにもできない。レフが今回の騒動を起こしたとするなら。ここまでの犯行を、単独でしたとは思えない。
まだ、出ていくわけにはいかない。たとえ、どれだけ残酷なことになったとしても。
『誰も私を評価してくれなかった！　みんな私を嫌っていた！　やだ、やめて……いやいやいやいやいやいやいや……だってまだ、なにもしてない！　生まれてからずっと、ただの一度も、誰にも認めてもらえなかったのに！』
「ぐっ……」
握る拳に力が入る。それでも、それでも体は動こうとはしない。
『所長……！』
立香ちゃんの、所長を呼ぶ声が聞こえる。
でも、無意味だ。
キミがどこに立っているのかは知れないが、どちらにせよ、レフを突破してそこまでは来れない。同時に、ボクも手は出さない。
「ごめん……」
それでも、この手が握るべきは。

もし、守らなくてはならない者がいるのなら。

『いや、いやぁぁぁぁぁぁっっ!!』

所長は、叫びと共に、カルデアスへと吸い込まれていった。ボクらの中で、彼女を助けることのできた者はいない。

そうだ、それが事実で。きっと、正しい。

『ダメです！　あの男に近づけば、先輩も同じように殺されます！』

マシュの声。

その通りだろう。なにより、立香ちゃんが殺されるのだけは避けなくてはいけない。

『ほう。さすがデミ・サーヴァント。私が根本的に違う生物だと感じ取っているな。改めて自己紹介しようか。私はレフ・ライノール・フラウロス。貴様たち人類を処理するために遣わされた、２０１５年担当者だ。聞いているな、ドクター・ロマニ。共に魔道を研究した学友として、最後の忠告をしてやろう』

「驚いた。ここまでの大事を起こしておいて、ボクを学友と語るとは」

所長はいなくなった。

悲しみがないわけではない。痛みがなかったわけじゃない。それでも――すべてに優先順位があるのなら。このロクデナシの選択を、誰かは許してくれるだろうか。

所長を見捨てた、このバカでダメな人間を、誰かは認めてくれるだろうか？　いや、そ

れすらも、考えている余裕はないのだろう。だからどうか、すべてが終わったのなら、そのときは恨んでくれ。蔑んでくれ。

　それで済むのなら、きっとボクはまだ、前を向いていられるから。

『カルデアは用済みになった。おまえたち人類は、この時点で滅んでいる』

　せめて、ことが解決するまでは、この悲しみも忘れてしまいたい。

「レフ教授。いや、レフ・ライノール。それはどういう意味ですか。２０１６年が見えないことと関係があると？」

『関係ではない。もう終わってしまったという事実だ。未来が観測できなくなり、おまえたちは未来が消失したとほざいたな。まさに希望的観測だ。未来は消失したのではない。焼却されたのだ。結末は確定した。貴様たちの時代は、もう存在しない。カルデアスの磁場でカルデアは守られているだろうが、外は冬木と同じ末路を迎えているだろう』

「そうでしたか」

　道理で、いくら待っても外部との連絡が取れなかったわけだ。

「通信の故障ではなく、そもそも受け取る相手が消え去っていたから……」

『ふん、やはり貴様は賢しいな。真っ先に殺しておけなかたのは悔やまれるよ。だが、それも虚しい抵抗だ。もはや誰もこの結末は変えられない。なぜならこれは人類史によ

る人類の否定だからな。おまえたちは進化の行き止まりで衰退するのでも、異種族との交戦の末に滅びるのではない。自らの無意味さに！　自らの無能さ故に！　我らが王の寵愛を失ったが故に！　なんの価値も得られず、跡形もなく燃え尽きるのさ！』

長ったらしく説明ご苦労さま。

おかげで思いの外情報は得られた。彼がおしゃべりでよかったよ。

『おっと。この特異点もそろそろ限界か。では、さらばだロマニ。そしてマシュ、４８番目の適正者。こう見えても私には次の仕事があるのでね』

「……」

危ないところだったかもしれないな。立香ちゃんとマシュに襲い掛からなくて助かった。

サーヴァントを相手にしてどう出るかは不明だが、不気味なことに変わりはないからね。

「でも、いまに見ていろ。▪ボクを……なにより、キミが善意で見逃したマスターは、舐めるべきじゃなかったと、そのうち知ることになるさ」

『ドクター！　そういうのはいいですから、至急レイシフトを実行してください！　地下空間が崩れます！　というか、それ以前に空間が安定しません！　このままでは、私はともかく先輩まで……』

「わ、わかった！　なに、もう実行させてるとも！」
　とは言え、これは……。
「ゴメン、そっちの崩壊の方が早いかもだ！　そのときは諦めて、そっちでなんとかしてほしい！　とにかく、意識だけは強くもってくれ！　意味消失さえしていなければサルベージはかのう――」
『っ、間に合わない！』
　ええ!?　ちょ、本気でやばいじゃないか！
「え？　Ｄｒ．ロマン、どこに!?」
「緊急事態ですよ!?」
　スタッフたちが止めるが、構うものか。
「ここであの子たちを失うなんて、できるわけないだろ！」
　スタッフへの指示を出すのもやめ、部屋を飛び出して走り、すぐさまカルデアスの前へと到達する。
　最後に聞こえた、焦ったような声。
　立香ちゃんの声こそ聞こえなかったが、どう見ても危険な状況だったのは間違いないだろう。意味消失に耐えられるかどうかは、正直本人たち次第だ。
　それでも。

バカみたいに。
必死で、願って。
手を伸ばす。
大事だから。あの子たちを、まだ見ていたいから。あの子たちと、話していたいから。
成長を、見届けてみたいから。
懸命に。より懸命に手を伸ばす。
時間的な距離も、時空的距離も関係なく。ただ、あの子たちのために。
「――……」
しばらく手を差し出していると、指先に、温もりが生まれる。
直後、ボクの両手を、なにかが力強く握った――。

未来を取り戻す戦い

立香ちゃんとマシュは、無事に戻ってきた。
いまだ立て直し途中のカルデアでは久々に、休憩時間が取れたところだ。
レフ教授の言葉が確かなら、もうことの解決をできるのはボクらのみだ。それどころか、残った人類すらボクらのみ。
「どう手を打つべきか……」
コーヒーを入れ、椅子に腰掛ける。
思えば、医務室の椅子に座るのも久しぶりな気がするな。
さっきまでは、ずっと管制室に居たからね。こうして、本来の職場にいるのが普通なのに。いまや、とてもじゃないがここで時間を潰してはいられない。
「立香ちゃんが起きるまでの休息だ」
などと思っていると、医務室の扉が開く。
「やあ、ロマニ」
「キミかい、ダ・ヴィンチちゃん。どうかしたのかな？」
入って来たのは、立香ちゃんとマシュとの連絡が途絶えている間、ボクを支えてくれ

た英霊だ。
細かな説明を、そのうち立香ちゃんにもしてあげないとね。もっとも、彼なら自分から好きな時間に会いにいって、自己紹介をして来そうだが。
でも、心配はいらないかな。
立香ちゃんのコミュ力はよくわかった。ボクの軽く数十倍だろう。
「おや、目に見えてへこんでいるね」
「そう見えるかい？」
「見えるとも、ロマニは人と普通に話せるくせに、なにを気にしているんだか」
「さらっと心を見透かすキミには言われたくないよ。キミはもっと、人との関係の作り方を気にするべきだ」
ボクがなにを言おうとどこ吹く風で、勝手知ったように、自分の分のコーヒーを入れ出すダ・ヴィンチちゃん。
「それにしても」
「うん？」
コーヒーを入れ終え、ボクの隣に腰掛けると、唐突に話し始めた。
「まさかあのロマニが、みんなを率いてしまうとはね」
「あの、はひどいなぁ」

「そうかな？　私の知っているロマニ・アーキマンという人間なら、一人であそこまではできなかったと思うけど」
　正直予想外だった、と彼は続ける。まったく、酷い言われようだ。
　あながち間違ってないから反論もできないしね。
「言われたように、本来のボクなら、きっと立ち向かうまでに相当の時間を使うし、いざ立ち向かったとしても、すぐに諦めていただろうね」
　この身ひとつでは、きっとなにもできないのだから。
　サーヴァント連中がいた時点で、ボクは詰みだろうと思う。
「さあ、どうかな。結局、キミは最後まで走ってしまう愚かな凡人だからね」
　しかし、ダ・ヴィンチちゃんはボクの言葉を否定する。
「ロマニ、キミは色々面倒だし面白みもまあ、ないわけではないが乏しい」
「キミはボクを貶しに来たのかい？」
「そんなまさか」
　本当だろうか？　言葉の端々に悪意を感じるんだけど……。
「本当に、まさかだよ。ロマニ、私がカルデアに残っているのもだが、キミはもっと、自分を見たまえ」
「え？」

「それだよ。まるで見ていないモノを、見直すべきだという意味だ」
キャスターにも、似たようなことを言われた。
ここにきて、ダ・ヴィンチちゃんにも言われようとは。でも、わからない。
「ボクは、自分を自覚しているけれど？」
「はあ……もはや病気だね。医療部門のトップが気づけないとは、大病だ」
「そこまで言うなら、ボクにも教えてくれてもいいんじゃないの？」
「うん、ごめんそれはできない。これはキミ自身が知らないといけないからね。他者からの答えなんて、答えであって答えじゃない。なにより、人はこれを自分で見つけるんだよ。キミも早く見つけたまえ」
なんのことか全然理解できない。
これじゃ見つけようもないと思うんだけど、言うだけ無駄かな。
「で、結局なにをしに医務室に？　発明で失敗して怪我人を出したわけでも、芸術のために犠牲者を出したわけでもないだろ？　まさか、この非常時にサボれるわけでもないんだし」
「ロマニ……キミも言うようになったね。でも残念、キミの仕事を増やしに来たわけじゃあない」
「なら、なにをしに？」

まさか、またか！　またボクをいじりにきたのか、この天才さまは！
「お、察しがついたようだね。それはなによりだ」
「なによりだ、じゃないよ!?　ボクの思考わかって言ってたら最低だよキミ！」
まあまあ、と遮ってくるけど、わかってやってるよね!?
「そうそう、聞いたよ。二人の帰還・時は大慌てで走ってたってね。なにかあったのかな？」
訊いてはくるものの、顔が笑っている。
内容は知っているけど、本人から直接聞きたいといった具合だろう。まったく、人が悪い。あれは正直、ボクにとってもどうして動いたのかわからない。ただ、思うままにやってしまったようなもので……。
「ロマニ？」
「ああ、ごめん。なんでもないよ。ついでに、話すつもりもない」
「ちぇ、少しはいい方向に走り出したかと思えば、自分のことは話さないんだから。でも――」
隣に座るダ・ヴィンチちゃんが、ボクの顔を強引に自分へと向けさせ、正面から見据える。
「――うん。なにかは変わったようだね」

「なにか？」
「私が天才であっても、そこまではわからない。まして、キミのような人間のことはね。おっかしいなぁ。キミはただの凡人に過ぎないんだけど」
「そこは否定しないよ」
　というか、やっぱり貶してるよね？
「で、キミが気にかけているのは、例のマスターかい？」
「気にかけてるかどうかで言えばイエスだけど、なにか含みのある言い方だね」
「ふむ、やはり彼女か。あの子、ロマニには眩しすぎるんじゃない？」
　ああ、わかっちゃうか。
　確かに、立香ちゃんの目は、言動は、ボクにはないものだ。なんの覚悟もなく前に立たれれば、眩しすぎるくらいだろう。
　人は光に集まりたがる。闇を追いやりたがる。けど、彼女はきっと――どちらも味方につける側の人間だ。
「眩しくても、しっかり見ていてあげないとね。ああいうのが、最後の最後、なにをするかわからないからさ」
「……そう。思った以上に、強くなったんだね」
　そう言い、ボクの顔を解放する。

強引だなぁ。首を痛めたらどうしてくれるんだろう。
落ち着くために、コーヒーをする。
「ところで――」
飲みながら、目線だけを彼にやる。
「――女の子二人を抱き抱えたって、本当かい？」
「ブッ!?――な、なにを言ってるのかな？　あれは事故だ！　そもそも、なにもしてない！」
「いや、まだなにも言ってないんだが、まさかほとんど自供するとは……つまらない幕引きだったね」
しまった！　これじゃ当初の計画通りやられてるじゃないか、ボク！
けれどウソはひとつもないよね。うん、だいじょうぶ。
「面白くもなんともない話だよ。あれはただ、安堵から力が抜けた拍子にだね」
「ふんふん。もうさ、話しちゃいなよ」
「――……はあ……そうだね。キミの思惑通りっていうのは釈然としないけど、仕方ないか」
下手に思い込みを持たれていても困るしね。
なにより、ダ・ヴィンチちゃんなら平気な面もある。

「えっと、あのときは――」

両手を突き出した先。

その両手に温もりが生まれたと同時に、ボクの手を握る感覚が起こる。

直後。二人の少女が、疲れ切った顔をしながらも、笑顔を浮かべ、ボクへと倒れかかってきた。

「ちょっと……っ!?」

もちろん、ボクはそこまで力があるわけじゃない。

大盾を持っているマシュはもちろん、ただの人である立香ちゃんすら支えきれず、その場に倒れこんだ。

「いったたぁ……帰って来てくれ、とは思っていたけど、なにもボクをクッションにしなくても――いや、そんなことはどうでもよかったね」

自分の上に倒れこむ、二人の少女。

初めての戦い。初めて知る殺意、悪意。人の善意。

多くの経験をしてきたし、聞くべき話も、聞かせたい話もあるかもしれない。それでも。

「よく帰って来てくれたね。おかえり、マシュ。立香ちゃん!」

最初に言う言葉は、決まっていたから。
「はい、ただいま戻りました、Ｄｒ．ロマン」
「ただいま、ロマン」
お互いに笑い合い、無事を確認しあう。会ったばかりの素人と、よくない出会い方をした同僚。
いまとなっては、人類最後のマスターと、カルデア唯一のサーヴァント。
「よく、頑張ったね」
そこまでで、たぶん、限界だったんだろう。
立香ちゃんが気を失い、慌てて空いていた手で支えに入る。
「せ、先輩！」
マシュが慌てて立香ちゃんを気にするが、マシュ、人の上で騒がないで欲しい……いや、マシュがそこまで気にかける相手ができたことを喜ぶべきか。
「ドクター、ドクター！　急いで先輩を医務室に！　それと、早く先輩から離れてください！」
「ええー……おっかしいなぁ」
そもそも、二人がいる限りボク退けないけどね？
「可及的速やかに！」

「マシュは割りと元気そうだね。うん、でも離れるのはもう少しだけ待ってくれ」
立香ちゃんの容態だけは確認しないと――あ、これ平気な奴だ。
支えている彼女から、寝息が聞こえる。
「疲れ、かな。サーヴァントと契約してそのまま戦闘続きだったし、なにより環境が環境だ。緊張の糸が切れたのかもね」
「そう、でしたか……すいませんドクター。つい慌ててしまって。では、私は先輩を部屋に連れて行きます。報告はその後で」
「うん、わかった。ああ、マシュもしっかり休むようにね」
「はい！」
そのまま、ボクの上から退いて立香ちゃんを連れながら駆けていくマシュ。
「はあ……」
これでやっと、スタート地点か。
さて、とりあえず二人は無事に帰って来たし、ボクも作業に戻ろうか。

と、こんなところかな。
「はい、ボクのお話終わり」
「くっ……ふふふ、ロマニ、キミって奴は……そこまでしている人間なら、普通そこから

ヒロインに惚れられるところだろうに……ああ、面白い！」
「ぐっ……別にいいんだよ」
笑うのを堪えているダ・ヴィンチちゃんは放っておいて、ボクも休憩は終わりにしよう。
これ以上話していると、余計ひどいことになりそうだ。
「ボクは先に行くからね。部屋を使うのは勝手だけど、改造はしないように。ついでに、室内での実験も禁止。じゃあ、またあとでね」
「うん、あとで。私は立香ちゃんとやらを見に行くとしよう。まだ寝ているんだろ？なに、起きたらそっちに行くよう伝えるから」
ボクに続き医務室を出て、反対側へと歩いていくダ・ヴィンチちゃん。
なぜか、彼はとても楽しそうで、そして嬉しそうだった。
「なんだったんだろう」
天才のことは考えてもわからないけれど。
それでも、やっぱり気にかけてしまうのはボクの悪い癖かもしれない。
管制室では、なにやら大騒ぎで、いろんな声が、聞こえてくる。
「さて、休憩明け早々、なにが起きたんだか……」
そうして、ボクはまた忙しく動くために駆けていく。まだ、なにも解決していないか

ら。
数瞬前までの、穏やかな時間の中にずっといることはできないから。
せめて、そんな時間が取れるくらいには、頑張ってみせようか。

人を否定するのは簡単だ。
その人物のすべてを根底から貶し、その在り方を、実績すらも汚せばいい。
けれど、人を肯定するのは難しい。
肯定するということは、対象の在り方を、すべて自分の中に招き入れることだから。
それは普通にできることではない。否、普通にできてはならないことなのだ。
だって、誰かを信じるなんて感情を、持っていなかったのだから。
人に頼っていいときなど、なかったんだから。
いつだって、どんな事態に陥ったっとしても。
すべては自分の過ちで。
解決するのが自分の役目だった。
そうあるべきであったのはわかっている。そうあらなければならなかったことも。

どれだけ困難であろうと、借りれる手はなく。どんなに過酷な場所であろうと、自分の力で生き残るしかない。

誰かを頼るようでは、なにかを祈るだけでは、決して良しとはされなかった。

最初からなにもなく。

最後まで、本当に欲するものを得られなかった愚者。

でも、成ってみて知ることもある。

人は他人を思うことはできるらしい、と。

気がついたのは、つい最近のこと。

この世界を見て、目線の同じ人間に触れて、バカみたいな騒ぎに翻弄されていく中で学んだことのひとつでもある。

いまとなっては、ボクにもそういう人ができたわけなんだけど。

「向こうがどう思ってるかは、また別問題なんだよねぇ……」

もちろん、ある程度以上の信頼関係は築けていると思ってはいるけれど。それでも、人の感情の機微を読み取れないボクでは限界がある。

あんな子たちに接するのは、ボクの人生の中でも稀だったからなぁ。接し方、間違えたりしてないよね？

マシュに反抗期並みの反応されたら癒しもなにもなくなるんだけど……立香ちゃん

はフレンドリーなようでまだよくわからない。わかっているのは、コミュ力の塊ってことと、クソ度胸の持ち主ってことかな。

「うん、二人ともボクと関わっていいような子たちじゃないな！」

もっとも、関わって話し合いをさせてくれないとこの先真っ暗なんだけどね！

だいじょうぶ、だいじょうぶ。

さっきマシュに理不尽に怒られたり、立香ちゃんの体に触れちゃったけど、なにもなかったし平気だよね？

などと、彼女たちが帰還した際の行いとこれからを見越しながら歩いていると、やっと管制室まで戻ってこれた。目の前では、瓦礫に囲まれた中、▪無傷で残っているカルデアス。

そして、新たに発見された特異点が７つ。

困難だ。

いまの戦力でこれらをすべて乗り越えなければ、レフの言っていた通り、人類に未来はない。

だが、攻略するにも、立香ちゃんとマシュの協力は必要不可欠。もっと言うなら、彼女たちに攻略してもらわなければならない。

「人に責任を押し付けて、すべてを託して……それをボクが強要すると言うのか？　―

―バカバカしい。ボクがされたことを、今度は彼女たちにさせてどうする気だ……磨耗して、最後は役目すらわからないまま潰れてしまったら？」

未来ある少女たちにあれもこれもと重荷を背負わせてはいけない。

わかっているとも。わかっては、いるんだ……。

「強要させなければ、未来はなく――ボクの戦いも、きっとそこで終わるだろう」

敵の目的も、正体も不明だと言うのに。

その全貌すら知れず終焉を迎える。あまりに滑稽だ。

「ちゃんと話して、決めないとね」

願わくば、少女たちがなにも背負わないことを。けれど、多くの経験が、出会いが訪れる道を進むことを。

なにより、彼女たちが、自分で決めた道を歩けることを。

「そうだな……ボクからは、意見をなにも言わないことにするよ。だから立香ちゃん。ボクらの意志は、キミに委ねるよ」

選択はできるんだ。

ボクのときとは違う。歩む未来を、選ぶ権利がキミにはある。楽な方に逃げてもいい。困難に、死と隣り合わせの大冒険をするのもいい。そのどれもが許される。正当化される。

「怖ければ蹲っていいんだ。戦えなければ、残りの1年を好きに過ごしてくれて構わない。戦えるのは二人だけ。ボクらは望まない。勝手な幻想を押し付けはしない。それはとても、残酷なことだから」

だけど。

つい、言葉が漏れる。

「キミはきっと、困難にも立ち向かうんだろうね」

感情の宿っていない、冷徹な声。

それが自分のものだとも気づかずに。

ボクの言葉は、無人の部屋の中で霧散していった。

起きて最初に目にしたのは、完成された美しさを持つ女性の▪方だった。

なにやらフォウと戯れていたみたいだが、私が起きたのを確認すると興味を失ったように構うのをやめた。

「起きたら絶世の美女がいて驚いたかい？　わかるわかる。でも慣れて。ね？」

まだなにも言ってないのだが、目の前の女性は勝手に納得し、首を縦に振る。

周りを見渡すと、ロマンと出会った自室であることが確認できた。

「そっか……私、マシュと一緒に冬木から帰ってきて……それから、ロマンに手を握ってもらって、安心したら意識が――」
「うん、現状を知るのはいいことだよ」
「えっと、貴女は？」
「私？　私はダ・ヴィンチちゃん。カルデアの協力者だ。というか、召喚英霊第三号、みたいな？　まあ、自己紹介さえ終わればあとの話は今後でいいさ。キミを待っている人もいることだしね。まずは管制室に行きなさい」
　待っている人……。
「ロマン？」
「くっ……ふふふ……ああ、いやごめん。確かにロマンも待っているけど、あんなのどうでもいいでしょ。まったく、あいつも本当に面白いことになったよね。さて、ロマンじゃないなら誰かは検討がつくね？」
　なぜか笑い出した彼女は、真面目な顔をして、そう聞いてくる。
　もちろん、ロマンじゃないならカルデアでの知り合いはもう一人しかいない。
　私はひとつ頷き、答えを返す。
「うむ、よろしい。ここからはキミが中心になる物語だ。キミの判断が我々を救うだろう。人類を救いながら歴史に残らなかっら数多無数の勇者たちと同じように。っと、こ

んな話は退屈か。さあ、行きなさい」
背中を押されるように、自室を出る。
「ああ、それとね」
そこで、ダ・ヴィンチちゃんに引き止められた。
「ひとつアドバイスだ」
「アドバイス？」
「そう。ロマンはとても臆病で、そして卑屈でバカで話を聞かないオタクの凡人だ」
「悪口ですか？」
「いや、正当な評価だよ」
えー……どうなんだろう？　どう聞いてもロマンの悪口に聞こえたんだけど。まあいいか。
「あいつはね、キミやマシュと接するときも悩んでる。あれは人の心の動きを見てないことは正直に言っていいし、聞きたいことはなんでも聞くといい。ロマンなら喜んで話してくれると思うよ。だいじょうぶ。キミがキミである限り、ロマンは絶対にキミを裏切ったりしないから。だから、仲良くしてあげてね」
「――よくわからないけど、だいじょうぶですよ。ロマンのことは信頼してるし、これで――ううん、見えないが正しいのかな。だから、いろいろ話をしてあげなさい。言いた

も、出会ってすぐに仲良くお話した仲ですから！」
それだけ言い残し、私は走り出す。
管制室にいる、私の大切な後輩の元に。

管制室での仕事は多い。
が、実を言うとまだ本格的な作業には入っていない部分もある。
この先を決める人物が答えを出したとき、初めてボクらは全力でサポート体制を築くからだ。もちろん、誰もが既に入れるとは思うけれど。
にしても、マシュも気になるんだね、やっぱり。
向こうはこちらに気づいていないけど、ジッとカルデアスを見つめている。
その瞳になにを映しているのかは読み取れないけどね。
なんて思ってたら、立香ちゃんが入ってきて、いきなりマシュに抱きつく。うんうん、少女たちが仲良くするのはいいことだよね。
と、まあ平和なワンシーンを眺めていた気持ちは置いといて、現実的な話をするとしようか。
正直、あまり面と向かって訊きたくはないんだけど、そんなことを言ってたらなにも

始まらない。
「コホン。再会を喜ぶのはいいけど、いまはこっちにも注目してくれないかな」
話かけると、立香ちゃんとマシュがボクへと視線を移す。
「まずは生還おめでとう、立香ちゃん。そしてミッション達成お疲れさま。なし崩し的にすべてを押し付けてしまったけど、キミは勇敢にも事態に挑み、乗り越えてくれた。そのことに、心からの尊敬と感謝を送るよ。キミのおかげで、マシュとカルデアは救われた」
そう、マシュとカルデアはだ。
「所長は残念だったけど……いまは弔うだけの余裕がない。悼むことぐらいしか、してあげられない」
「そう、ですか……」
「ああ。立香ちゃんにはつらいことかもしれないが、いまは我慢してくれ。いいかい。ボクらは所長に代わって人類を守る。それが彼女への手向けになるだろう」
頭を失ったも同然だが、かろうじて。すんでのところで、カルデアは留まっている。
まだ、ボクらには機会が残されているのなら。
「カルデアスの状況から見るに、レフの言葉は真実だ。外部との連絡は取れない。カルデアから外に出たスタッフも戻ってこない……おそらく、既に人類は滅びている。この

カルデアだけが通常の時間軸に無い状態だ。崩壊直前の歴史に踏み留まっている、ということかな。宇宙空間に浮かんだコロニーと思えばいい。外の世界は死の世界。この状況を打破するまではね」

「……解決策があるんですね？」

立香ちゃんにそう問われる。

もちろん、無いわけじゃない。

「ふう……」

息をひとつ吐き、自分の中に、話す体制を作り出す。

「冬木の特異点はキミたちのおかげで消滅した。けれど、未来は変わっていない。なら、他にも原因があるとボクらは仮定したんだ。その結果が――」

復興させたシバでスキャンした地球の状態を見せる。わけのわからない、地図の集合体のような地球。

「――この狂った世界地図。新たに発見された、冬木とは比べものにならない時空の乱れだ。よく、過去を変えれば未来が変わる、というけど、ちょっとやそっとの過去改変じゃ未来は変革できない。歴史には修復力があってね。確かに、人間のひとりやふたりを救うことはできても、その時代が迎える結末――決定的な結果だけは変わらないようになっているんだ。でも、この特異点は違う。これは人類のターニングポイント。現在

の人類を決定づけた究極の選択点。それが崩されたとなれば、人類史の土台が崩れることに等しい」

新たな七つの特異点。それらが落ちれば、ボクらに未来はない。

どれかひとつでも、欠けることは許されない。

「この特異点が出来た時点で、未来は決定してしまった。レフの言う通り、人類に２０１６年はやってこない――けど、ボクらは違う。カルデアはまだ、その未来に到達していないからね。わかるかい？　ボクらだけがこの間違いを修復できる。こうして崩れている特異点を元に戻す機会がある」

結局、ボクはこう問わなければならないのだろう。

どれだけ自分で否定しても、変わらず、ボクは愚か者だ。

「結論を言おう。この七つの特異点にレイシフトし、歴史を正しいカタチに戻す。それが人類を救う唯一の手段だ。けれど、ボクらにはあまりに力がない。マスター適正者はキミ以外凍結。所持するサーヴァントはマシュひとり。この状況でキミに話すのが、どれだけ残酷かは理解しているつもりだ……酷いことを言おうとしているのも、十分わかっている。ずるい問いかけだともだ！　けど、ボクはキミに問わなければならない」

目の前に立つ、少女の顔を見る。

真剣な、それでいて、どこか緩い雰囲気の少女の顔を。

「マスター適正者４８番、立香。キミが人類を救いたいのなら。２０１６年から先の未来を取り戻したいのなら。キミはこれからたった一人で、この七つの人類史と戦わなくてはならない――その覚悟はあるか？　キミに、カルデアの、人類の未来を背負う力はあるか？」

言っていて、やはり思う。

この状況下で。この場面で。

いったい、ボクはどれだけ過酷な運命を背負わせるつもりだろうか。

なのに、彼女は薄く笑みを浮かべるんだ。どうしてか、恨むような顔も、嘆く声も漏らさずに。ただ、前だけを向こうとするんだ。

「……もちろんです。私が、私たちが」

隣に立つマシュの手を握り、

「――完膚無きまでに、ぜんぶ救ってみせますよ」

そう、彼女は宣言した。

ボクには決してできない選択を、受け止められるんだね。それはとても、羨ましくて。そして、眩しすぎる。でも。

「ありがとう。その言葉で、ボクたちの運命は決定した。これより、カルデアは前所長オルガマリー・アニムスフィアが予定した通り、人類継続の尊命を全うする。目的は人類

▪史の保護、および奪還。探索対象は各年代と、原因と思われる聖遺物・聖杯。我々が戦うべき相手は歴史そのものだ。キミの前に立ちはだかるのは多くの英霊、伝説になる。けれど、生き残るにはそれしかない。いや、未来を取り戻すにはこれしかない」

その場しのぎになる場面もあるだろう。

絶望的な場面もやってくるのかもしれない。

それでも。

前を向き続けるマスターが歩みを止めないのなら。もしかしたら、力を貸してくれる存在だっているかもしれない。

絶望させられるように、奇跡だって、起きるかもしれない。

「……たとえ、どのような結末が待っていようとも、だ」

だからこそ、ボクはキミたちにこそ託したい。

「以上の決意をもって、作戦名はファーストオーダーから改める。これはカルデア最後にして原初の使命。人類守護指定・グランド・オーダー。魔術世界における最高位の使命を以って、我々は未来を取り戻す！」

キミたちなら、きっとなにかをやらかしてくれると思えるから。

人を肯定するのが難しかったとしても。
誰かを信じることはできる。
仮に、誰からも理解されないとしても。誰も、理解できないとしても。
他人を信じるのは、自分の勝手だと思いたい。
だって、そうだろう？
誰かを信じるのに、他者の意見は必要ないじゃないか。
たとえ、信じる本人の意見だったとしても――。

束の間の休息

一人の人間の話をしよう。

いや、別に個人個人が好きなわけじゃないんだけど、ね？　ほら……うん、深くは言わない方がよさそうだ。

無理をしている凡人の、特別でもなんでもない話。

主役は彼ではないし、活躍するにも地味過ぎる。

必要なのかと言われればどうだろう？　私からすれば、人の身である彼は特段いるとは思えない。

正直な話、現状彼だけを見ていても退屈だ。物語を楽しむには、彼の隣にいる明るい髪の少女やそのサーヴァントを眺めていた方が退屈しない。なにせ、僕は彼女の綴る物語のファンになってしまいそうだからね。できることなら、夢にでもお邪魔したいところだ。

まあ、彼女を見ているなら、結局は彼も見えてしまうのだけれど。というか、彼もいなければ面白みに欠けるのは確か……まったく、困った男だね。

いなければいないでいいし、いたらいたで意味がある。この上なく厄介だ。

今後、彼女の話をするときも必ず出てくるであろう人物。最早この物語において確固たる居場所を築いてしまっている者。

参ったねぇ。

彼を見ているのは苦しい部分もあるんだが、見ていれば見ている程続きが気になってしまう。まさか、凡人の彼がそうさせるとは。とんだ大番狂わせじゃないか。

うん、悪くない。悪くはないとも。あのバカの人間味溢れる愉快な姿を観れるなら。望んでいたわけではないが、祝福しようじゃないか。僕には未来は見通せないけれど。

どうか、彼が彼らしく振る舞えることを願っていよう。

さて、それじゃあブログの更新でもしてこようかな。フフッ、バレるときが楽しみだ。彼女と実際に話してもみたいが、もしそのときが来たのなら、一ファンとして、彼女と多くのことを話そう。教えよう。ついでに、バカの反応でも見ようかな。おおよそ、予想通りの反応をするだろうけど。

とりあえず、現在の状況でも見ながら、ゆっくりとブログの更新作業をしようじゃないか。

彼の楽しみが、ひとつでも多くあるように。

いやぁ、よかった。

なんていうか、一仕事終えた気分だ。もっとも、実際にしていたんだけど。

「でも、本当によかった」

他の子たちには悪いけど、残った人類最後のマスターが、立香ちゃんなのは幸いだった。下手に力のある、慢心しやすい子や臆病な子だと任務に失敗しかねない。それに、マシュとの相性もあったからね。

正直なところ、マシュにも歳の近い友人――もといマスターができたのは僕も嬉しい。立香ちゃんならサーヴァントを道具として見ることもないだろうし、むしろかわいい後輩として接してくれるはず。

「いまさらそんなことを心配するのは失礼かな。冬木での二人を見てれば、わかることだしね」

「おや、一人でにやけてると気持ち悪いぜ、ロマニ」

「そういうときは話しかけずに見守るのがマナーだと思うよ、ダ・ヴィンチちゃん」

人がせっかく貴重な休憩時間をまったり過ごしているというのに、天才というのは空気を読めないものらしい。彼なら読んでいて壊しにきた可能性も否定できないけど……。

「なにか問題でもあった？　キミにも解決できない難問とか」

「ないない。時間的に余裕があったからね。邪魔しに来たのさ」
迷惑にも程がある。
ボクだって暇ではないのだ。今日はスタッフのみんなにも休むように言ってあるのだから、穏やかな日々を過ごしたいのに。まあ、ボクはやることばかりでそうそう休めないんだけど。
「まったく……気が済んだら帰ってよ？　こっちはこれから大忙しなんだから」
「おや？　こんな美女を捕まえといて無視するのかい？　それはちょっとつれないんじゃないの？」
人の頬を突つきながら尋ねるダ・ヴィンチちゃん。
「勝手に捕まりに来ただけだろ？　だいたい、キミがボクを捕まえに来たっていうのが正しいんじゃないかな」
「ああ、なるほど。うん、その解釈も有りだ。ロマニ一人なら、どうということはない。なんならどうだい？　疲れているだろうし、この極上の女性たる私が面倒を見てあげようか？」
楽しそうだ。まるで、自分が退屈しないための行動のようでいて、他者のことも気にかけている。
相手をするのが少しばかりやりづらいところはあるけれど、彼は人の心を知らないわ

けじゃない。だからこそ、ボクはやりづらいのだけれど。
「遠慮しておくよ。ダ・ヴィンチちゃんの相手は荷が重いからね。時間あるなら、立香ちゃんの相手でもしてあげたらどうだい？」
「彼女の？　う～ん……それでも構わないんだけど、ほら、彼女の隣にはマシュがいるだろう？　ならそれで十分かなと。下手に介入して二人の仲睦まじい空気を壊すのはもったいないし、マシュの時間もそう多くはない。でしょ？」
「……ああ。それは否定しない」
　忘れたことは一度もない。
　最初から最後まで、あの子の時間はおおよそが決められていることを。だからこそ、彼女にこそ多くを知ってほしい。その点、特異点を巡る旅は、あの子に多くをもたらしてくれるかもしれない。
「そこだけは、この状況にも感謝できることなのかもしれないね」
「トップが言っていい言葉じゃないぞ」
「いまのは同僚としての言葉だと思って見逃してほしいな。残念ながら、人は情が移ると弱い部分もあるみたいだからね」
　おふざけ半分に伝えると、やれやれと首を横に振り、ため息を吐かれた。
「困ったトップだね。でも嫌いじゃないよ」

「はいはい」
「ほんと、釣れないねぇ。人類最後のマスターが男の子だったらおとしてる自信はあるんだけど、どう思う？」
　仮にも程がある話題を選んできたな。
「未来ある若者が真実を知って絶望しないことを祈るよ」
「おいおい、絶望する前提はやめたまえよ。この身体でおとしにいって満足させないとでも思うのかい？」
　背後に回った彼は、なぜかボクに抱きついてきた。いや、本当になんで？
「人類最後のマスターは女の子だし、第一ボクじゃないよ」
　背中に当たってるから、早く退いてくれないと困る！　心はあれだけど身体はマズイ！
　ああ、もう……変人はやることが大胆な上に遊び半分で行動に移すと来るから救えないんだ！
「ここで黙るのは得策じゃなかったね、ロマニ」
　意地の悪い笑みを浮かべ、人の肩に顎を乗せてくる。ここで否定してはなにを言い出すかわからないのでそっとしておこう。
　むしろ構わない方がいいかもしれないし、ここはマギ☆マリのブログチェックでもし

ようかな。
　冬木の観測ばかりしていたから、更新されたかどうかのチェックすらしてなかったんだ。
「ほう。これはこれは」
「なに？」
　ブログを眺めていた彼が不思議そうにしていたので、無視することなく尋ねる。が、
「いや、なんでもない。気のせい――もとい、話すことでもない」
「そう？　じゃあボクはブログのチェックをさせてもらおうかな」
　やっぱり、更新された記事がいくつかあり、その隣にはいつの間にかサイドバーが作られていて、メニューのひとつに投函箱なるものまであった。
「なになに？　世の中の疑問、困ったことがあったら送ってね。きっとその疑問、悩みに答えるよ、か。よし、万策尽きたら送ろう」
「ロマニはたまにというか、結構残念だよね」
　かわいそうな奴を見つような冷ややかな視線が痛いなー。でも気にしないぞ。
「ほどほどにしておきなよ？　じゃあ、少しお節介かもしれないけど、彼女たちの様子も見てこよう」
　話は終わったとばかりに、踵を返すダ・ヴィンチちゃん。

結局なにをしに来たのかは定かじゃないけど、面倒事にならなかったのだから良しとしておこう。

「ああ、そうそう」

去り際、こちらを振り向く彼の顔には笑顔が浮かんでいて――。

「ロマニ。無理は禁物だが、無茶はするといい。なんだかんだ、凡人になったキミが奔走しているのを見るのは悪くない。もちろん、倒れない程度にしなよ。でないと大変だからね」

――僕の隣には、いつの間に用意したのか、淹れ立てのコーヒーの入ったカップが置かれていた。

まだ湯気の立つカップは温かく、ここ数日の疲れを静かにほぐしていくように感じる。

「ほんと、天才の行動はわからないなぁ」

それでも、彼はボクの友人であり、同僚であるのだろう。

初めて会ったときはそれはそれは怒られたものだ。そして、心配された。ふたつの出来事は別々のもので、けれど重なっていて。彼も割と曖昧な理由で協力してくれているうちの一人だ。

「昔のように色々見れればと願うのは、身勝手かな……まあ、見れてもなにかできるって

わけじゃないからいいか」

もし、なんてことはない。

ありえたかもしれない別の未来を望むのは意味のないことだと知っている。

一度でも幻想に縋ってしまえば、二度と立ち向かうことはできないだろう。だからこそ、どんなに困難だろうとも、現在を見ていなければ。

だいじょうぶ。

ここにはボク一人じゃないんだから。明日からはまた、未来を取り戻す戦いが始まる。それまでの、ほんの一時の休息。

だから、少しだけ眠ろう。そして起きたなら、きっとみんなが待っていてくれるから――。

時間というのは経つのが早いもので、立香ちゃんは二日後には特異点にレイシフトすることになるだろう。

前回と同じようにといかなくても、どうか安全であればいいんだけど……そこは保証できないし、安全な特異点なんてありえない。

無理、無茶を強いる場面も多々出てくるはずだ。

もちろん、それをただ見ているわけにはいかない。だからこそ、ボクたちも相応の準備をしてある。

というのも、なにかと言えば、昨日、立香ちゃんの――カルデアの戦力補充があってね。聖遺物なんて根こそぎ破壊され尽くして残っていなかったんだけど、ダ・ヴィンチちゃん協力のもとなんとか英霊召喚を行えた。

その結果と来たら――。

「おやドクター、疲れた顔をしているな。少し待っていたまえ。なに、紅茶程度なら飲んでいく時間はあるだろう」

有無を言わさず席につかせる手際の良さ。

無駄のない動きを続ける、赤い青年。

「ボクにも予定があるんだけどなぁ」

などと言いつつ、おとなしく待ってしまうあたり、彼はうまい。

あらかじめ用意しておいたのか、手際よく目の前でお茶会よろしく展開されていく。こうなっては、彼を無視してしまうことはできない。したとしても、いいことはないだろう。

「キミは普段から休まないと聞いたぞ。まったく、休息は次の活動を円滑にするために必須だ。まして、カルデアのトップである男が倒れでもしてみろ？　他の職員だけでは

できないこともあるだろ。って、聞いているのかね？」
「あ、ごめんごめん。うん、もちろん聞いてるよ」
でも結構説教が多いんだよね。聞き流さないといけない程度には。
適当に対処している中、気付いているのかいないのか、彼はため息を吐きながらも紅茶を注いでいく。
出会って間もないので非常に言いづらいのだが、これでも彼のクラスはアーチャーだとか。昨日はマスターである立香ちゃんの世話もしていたみたいだし、なんというか、そもそもサーヴァントらしくない。
「アーチャー、こう言ってはなんだけど、生前料理長でもしていたのかい？」
「む？　いや、その類の職に就いたことはないが。ほら、せっかく煎れた紅茶が冷めてしまってはもったいない。早く飲みたまえ」
「あ、うん……ありがとう」
紅茶か。
前にレオナルドに煎れてもらったことがあるけど、彼が召喚されてすぐのことだったからなぁ……味については言及しないでおこう。
そんな▪過去を思い返していると、視界の端に青い影が映った。
「ようアーチャー。なんか簡単に食えるもんはねえか？」

かと思えば、紅茶を煎れていたアーチャーの隣に、いつの間にか一人の男性が立っている。

彼も帰ってきたのか。ということは、立香ちゃんとのお話は終わったようだ。レオナルドから、大まかな説明も受けて来たのだろう。

「ランサー、キミは私を給仕係かなにかと勘違いしているのではないかね？」

「あ？　そりゃおまえさんほど向いてる奴はいないだろ」

「ほう……それはどういう意味だランサー」

「言ったまんまに決まってるだろうがアーチャー」

なぜ会って早々喧嘩腰になるのやら。

ランサーは召喚してすぐ、顔を見ただけで真名がわかった。特異点Ｆでも立香ちゃんとマシュを支え、導いてくれた彼の別側面だろう。消滅間近になって、次はランサーで召喚してくれと言っていたのを覚えていたのもあってか、彼がクー・フーリンであることはわかる。

だが、アーチャーはまるでわからない。一応、今回の聖杯戦争は真名が明かされていようといまいと大きな差はないので聞いてはいるのだが……エミヤなんて英雄、知らないんだよねぇ。

ボクもかなりの知識を蓄えているとは思っていたんだけど、まるで知らないとは不思

議だ。
「ウソを言っているようでもなかったし」
けれどここまでクー・フーリンと仲が悪いっては生前関係があったように思うんだけど、記憶にエミヤなんて名前はない。
特異点Fでもなにか『今回は』とか『悪いな、全部が』とか断片的に聞こえていたんだけど、これでなにも関係ないと思うのは無理だ。
「まさか、他の聖杯戦争で会ってたりしてね」
いまも目の前で繰り広げられる口喧嘩。
よく見ていると、嫌悪し合っているというより、長年そうしてきたような感じにも見える。お互いに文句を言いつつも自然体で。
「ああ、わかったよ」
「なにがだ？」
「まだいたのか？」
一人納得したところ、二人から声が上がる。というか酷いな！
「ひとまずボクの扱いは置いておくとして、キミたちがあれだね。嫌よ嫌よも好きなうちって――」
一閃。

二人の手に握られた宝具が頬を掠めて壁に突き刺さる。
「「死にたいかドクター（軟弱男）！」」
「――キミたちはまずボクに対しての態度から改めようか!?　一般人相手に宝具を取り出すとか男らしくないぞ！」
下手に避けようとしてたら逆に当たってるからね!?　アーチャー。いや、エミヤくんに関しては人の体調を気にしていながらなんて暴挙を……。
「ったく、これがキャスターのオレが気にかけてた男とはねぇ」
やれやれ、と首を横に振るクー・フーリン。
そうか、彼は冬木での映像を観てきたのかな？　確かにキャスターの彼にはだいぶ気にかけてもらってはいた。
「いったいどこを気にしてたんだが。まあ、他のオレのことはどうでもいいけどよ。おかしな課題が出てたが、あれはオレが出したもんじゃねえから受けつけねえぞ。キャスターのオレに会うことがあったら、そのとき答えてやりな」
「……わかった、覚えておくよ」
「おう、そうしとけ」
彼は会話を終えると適当な席に腰を下ろし、散々言い合っていたエミヤくんに料理の注文をしていた。相手をしているエミヤくんも渋々といった様子だったが調理はする

ようで。
　やっぱり仲はいいんじゃないだろうか。
「おや、ロマニ。キミが休んでいるとは珍しいじゃないか。うん、たまの休息は必要だ。あ、隣失礼するよ」
　こちらの言葉を聞きもせずに横の席に座ったのは、もはや長いつきあいとなったレオナルドだった。
「相変わらずの身勝手さだな」
「おいおい、こんな美女が隣に座ってやっているのになんて口だい？　これか？　この口が悪いのか？」
　ボクの▪唇を引っ張ってくるが、ここは我慢だ。何度もいじられて成長した精神力は▪伊達じゃない。反応を見せるより無視した方が早く終わるんだから！
「チッ、小賢しくなったねロマニ。今度キミが反応せざるを得ない発明品を持ってくるとしよう」
「よおし、発明される前にことごとく邪魔してやるぞ」
　互いに別々の反応をしながら牽制する。
　彼の発明は基本被害者が出るからね。立香ちゃんたちが巻き込まれないよう注意しないと。最悪エミヤくんたちの力を借りてでも破壊する日も来るかもしれない。

「それだけ平和な日々が訪れるなら、悪くないのかもしれないけどさ……」
あと二日。
そうしたら、長い戦いが本当の意味で始まることになるだろう。ボクの――いや、彼の視たものが現実になるのか、なるとして、いつか。
全てを受け入れる日が来るかもしれない。
これはもう、多分ボクの物語ではなくなっている。世界は既に、中心を決定した後だ。ならば彼女こそが相応しい。
「あ、ロマン発見！　ってあれ？　みんないるじゃん！　マシュ、みんな揃ってるよ～」
「先輩、待ってくだい！」
こちらに駆けてくる、元気な声がふたつ。
これまではボクが一人でなんとかしなければと勝手に思っていた。なんせ、危機を知っているのはボクだけだったのだから。
でも違ったんだね。
「キミたちが、世界を救うんだろう。未来を取り戻すんだろう」
なら、これはキミたちの物語。
ボクは最後まで、見届ける役目なんだと思いたい。だって、そうだろう？　あの子たちのしていくことを、この目に焼き付けておきたいじゃないか。

いつまでも、いつまでも――。

僕らの証明はどこにある

ボクは少し、彼女たちを侮っていたのかもしれない。
モニターを通して映る、人類最後のマスターと、そのサーヴァントたちの戦闘。
危険な場所でも絶対に退かない一人の少女。
今は特異点での戦闘も終わり、協力してくれた現地のサーヴァントと和やかな時間を過ごしている。
叛逆の騎士だろうと作家だろうと、彼女にとっては関係なく。途中出会ったサーヴァントたちとも普通に話していたっけ。
もっとも、その二人でさえ、彼女の元に集まってきているんだけどね。
「とはいえ、仲間割れしそうなのはよくないな」
モニター越しでしかないし、彼ら彼女らからしたら、なんてことはないやりとりなのかもしれない。でもまあ、なにごともハッピーエンドじゃないとね。
「ははは。なんだか騒がしくなってきたね。事件も解決したし、大団円には相応しいけど」
『うん、みんな仲良くしよう！　ほら、そこ喧嘩しないの！』

マスターとして多くの英霊に指示を出す。
本来の聖杯戦争とはまるで違う、一人のマスターにつき何人ものサーヴァント。彼女でなければ、ここまでは来れなかっただろう。
相手を下手に道具扱いしていたら。
自分でなければ救えないと傲慢で身勝手だったら。
保身のためだけに戦い、すべてをサーヴァントに任せていたら。
きっと、彼らは協力してくれたとしても、互いに笑いあえるような関係は築けなかったに違いない。
「人類最後のマスター……立香ちゃんが選ばれたのは、なにか意味があったのかな？」
答えのない問いをするだけ無駄ではあるけれど、きっと彼女が残ったのは特別な意味があったのだろう。そう思いたい。ただ偶然、その日作戦から外されただけの凡人。僕らの世界とは関わりを持たない一般人。そんな彼女が、未来を取り戻す戦いの最前線に立っている。
「もうこれで4つ目だ。彼女は間違いなく、マシュや彼らのマスターだよ、ロマニ」
隣でサポートに回っているレオナルドも立香ちゃんを認めていた。いや、少なくとも彼は最初から認めていたのかもしれないが。
「最初はどうなることかと思ったけど、なんとかなるものだね。っと、呑気に話している

▪場合でもないか。聖杯の回収を済ませないと。もうこの時代に脅威はないからつい気が……待った、なんだこの反応は!?」

『ドクター?』

「みんな気をつけて！　地下空間の一部が歪んでいる！　何かがそこに出現するぞ！　サーヴァントの現界とも異なる不明の現象だ！　……いや、不明？」

観測機やモニター確認していくが、

「これはむしろレイシフトに似ているか？　そんなはずはないぞ、カルデア以外にこの技術は……そもそも、外部の人間がいるはずもない状況で!?」

何がなんだかさっぱりだ！　けれど、この状況がまずいものだっていうのは感じ取れる。

隣のレオナルドも、忙しそうに機器の操作を始めている。

だが、なんらかの準備も対策を取る暇もなく、それはやって来た。

「――ッ、空間が開く！　来るぞ立香ちゃん！」

彼女に指示を出そうとした直後。

最初に聞こえたのは、感情をまるで宿していない男の声だった。

『魔元帥ジル・ド・レェ。帝国真祖ロムルス。英雄間者イアソン。そして神域碩学ニコラ・テスラ。多少は使えるかと思ったが――小間使いすらできぬとは興醒めだ』

その声はやがて苛立ちを含み出し。
『下らない。実に下らない。やはり人間は、時代を重ねるごとに劣化する』
声は段々と聞き取りやすくなっていくのだが、
「ああクソ、シバが安定しない、音声しか拾えない！」
モニターに映る映像はなく、向こうの状況が確認できない。一方的な、正体の掴めない何者かの言葉が届くだけ。
「どうした、何が起きたんだマシュ!?」
『わ、わかりません！　ヒトのような影がゆっくりと歩いてきて――』
『……下がってなレディ。ありゃあヤクいぜ。まっとうな娘っ子が直視していいモンじゃねえ』
『そのようでございますねぇ。私も退散退散。一尾の身では見るだけで穢されそうです』
『いや、おまえさんは平気だろうが。オレとアーチャーが前に出る。せめてサポートくらいはしていきな』
『ふむ……それが道理と言うものか。すまないがマスター、指示を頼む。マシュ、キミはここでマスターである立香を守りたまえ』
マシュとの会話に割り込んできた現地のサーヴァントと、彼女のサーヴァントたち。

どうやら僕と話している余裕はないらしく、一騎当千の彼らの声にも、緊張がはらんでいる。口にする言葉は強気だが、いったい現地はどうなっているんだ？

モードレットやシェイクスピアの声も聞こえてくるが、神そのもののような気さえするとまで言わせる相手とはいったい……って、作家陣はなに二人して逃げようとしてるのさ！

『だがまさか、本命がこの段階でやって来るとはな』

必死になって止めたいところだが、アンデルセンが不可解なことを述べた。

「本命!?　本命ってどういう事だい!?　いまそっちではなにが起きていると言うんだ、立香ちゃん、状況を！　キミが見ているモノがなんなのか教えてくれ！」

まさか、キミたちの前にいるとでも？　今回の大事件を引き起こした張本人が、そこにいるとでも!?

『ほう。私と同じく声だけは届くのか。カルデアは時間軸から外れたが故、誰にも見つけることのできない拠点となった。あらゆる未来――すべてを見通す我が眼ですら、カルデアを観ることは難しい。だからこそ生き延びている。無様にも。無惨にも。無益にも。決定した滅びの歴史を受け入れず、いまだ無の大海をただよう哀れな船だ。それがおまえたちカルデアであり、立香という個体』

何者かの、声が響く。

何事かを語っている。けれど、ああ――だけど。何者かの言葉の多くがすり抜けていく。

当然だ。

あらゆる未来――すべてを見通す我が眼。

そんな言葉を聞いて、聞かされて、どうしろと言うんだ。少なくとも僕には、その言葉を口にすることができる存在を知っている。どうしようもなく、知ってしまっている！

『燃え尽きた人類史に残った染み。私の事業に唯一残った、私に逆らう愚者の名前か』

注意深く聞いていれば、どうしても考えてしまう。

未来を見通すことができる者で、一人称に私を使う者。違う、あいつじゃない。だとすれば、彼の名は――。

『――ドクター。いま、私たちの前に現れようとしている、のは――』

『おまえは誰だ！』

マシュが途切れ途切れに報告をしようとし、立香ちゃんは勇敢にも名を訪ねる。

彼女は折れない。

相手がどれだけ強大だろうと、凶悪だろうと関係なく立ち向かう。そんな彼女の姿に、いつだって救われてきた。救われている。たとえその背中が見えないとしても、僕

の想いは揺るがない。

『ん？　なんだ、既に知り得ている筈だが？　そんな事も教わらねば分からぬ猿か？　だがよかろう。その無様さが気に入った。聞きたいのならば応えてやろう』

そうして、僕らの敵はその正体を明かす。

僕自身が知りたかった、その名前を白日の元に晒す。

『我は貴様らが目指す到達点。七十二柱の魔神を従え、玉座より人類を滅ぼすもの。名を――ソロモン。数多無象の英霊ども、その頂点に立つ七つの冠位の一角と知れ』

現場にいるすべてのサーヴァントが息を呑む。

「やっぱり……マシュ、念のため聞くよ。ソロモンと、確かにそう名乗ったのかい？」

『……はい。間違いありません。確かにソロモンと……紀元前１０世紀に存在した古代イスラエルの王と同じ名を名乗りました』

「本当に……ソロモンが……？　こんな、こんなバカな事が――」

どうしてだ？　あってはならないぞこんなこと！　彼が存在し、そして崩壊を招いている？　いや、そもそも彼はサーヴァントのはずだ。であるのなら、存在していることすら……ッ！

『無能どもと同じ位なはずがないだろう。私は死後、自らの力で蘇り、英霊に昇華した』

「はあっ!?　み、自らの力で蘇っただって……!?』

なにを言っているんだあいつは！　死後蘇った？　そんなことがあるわけが――。

『英霊でありながら生者である。それが私だ。故に、私の上に立つマスターなどいない。私は私のまま、私の意思でこの事業を開始した。愚かな歴史を続ける塵芥――この宇宙で唯一にして最大の無駄である、おまえたち人類を一掃する為に』

無駄、か。

間違いなく、彼はソロモンなんだろう。考えもしなかったが、事実なんだろう。

でも、出した答えは無駄だったのかい？　だとしたら、大きく違う。仮にも彼であるのなら、真に彼だと言うのなら、その解答には異議を申し立てたいところだ。

否定してやりたいところだ。

再度、問いたいものだ。

けど、僕はそこには行けない。悪目立ちすることすら、できなくなった。無関心であろう彼の注意を、僅かでも向かせたくはなかった。なにより、これはキミたちの物語。

綴られるのは、キミと彼女の冒険譚。

「だから、その役割は立香ちゃん、キミが変わってくれ」

決して、この声が届いたわけじゃないんだろう。誰に言われるまでもない。彼女はもう、自分で判断し、自分で立てる。

『世界を、滅せるもんか！』

力強く言った言葉は、しかし。

『できるとも。私にはその手段があり、その意思があり、その事実がある。既におまえたちの時代は滅び去った。時間を超える我が七十二柱の魔神によって』

淡々と事実のみを話す魔術王によって、かき消される。

「時間を超える……あの魔神たちは、本当にレメゲトンにある魔神だったのか……？いや、でも伝承とあまりに違う！　ソロモン王の使い魔があんな醜悪な肉の化け物のはずがない！」

彼の言葉を聞いていると、嫌でも実感する。

だが。だが、魔神柱がソロモンの使い魔の姿だとは、どうしても認められない。

『哀れな。時代の先端に居ながら、貴様らの解釈はあまりに古い。七十二柱の魔神は受肉し、新生した。だからこそあらゆる時代に投錨する。魔神どもはこの星の自転を止める楔。天に渦巻く光帯……これまで巡った特異点にあった光の輪。どこにいようと、必ず目に入ったあの光は、まさか！

『あれこそ我が第三宝具、「誕生の時来たれり（アルス・アルマデル・サロモニス）、其は全てを修めるもの」。あの光帯の一条一条が聖剣程の熱戦だ。貴様らも見た覚えがあるアーサー王の持つ聖剣を幾億も重ねた規模の光。即ち――対人理宝具である』

まずい……まずい、まずいぞ！
話はまだ終わっていない。彼への対抗策も練れていない！
モードレットはもちろん、エミヤくんやクー・フーリンは戦うしかないと構えを取る。
マシュは、ああ、マシュはまだ呑まれている。このままじゃ、戦線が崩壊してもおかしくない！
なんとかマシュに戦意を取り戻させようとするが、
『それなりの知恵者かと思えば、貴様らの司令官は取るに足らぬ魔術師らしい。もはや私が気に留めるのは娘、その盾を持つ貴様のみだ』
呆れと共に、失礼なことを言われた。
あながち間違いではないが、どうも、彼に言われるのだけは我慢できない。
僕は平凡な、それこそ平均的な人間なんだろう。別に高望みしたわけじゃない。知りたかった。そう在ってみたかった。そう在れる僕を、キミがバカにするのかい？
言ってやりたい。
教えてやりたい。
でも、僕は言葉を飲み込まないといけない。
『さあ、楽しい会話を始めよう』
彼がマシュに興味があると言ったのだから。彼女だけを、危険に晒してはいけない。

彼女を、剥き出しの彼に臨ませてはいけない。
『なに、今回は特別だ。その健気さに免じて、使うのは四本程度に留めてやるよ』
直後。
彼の前に、おぞましい姿の肉の化け物――魔神柱が姿を現した。